

勤労青少年は何を考えているか

(昭和54年度「勤労青少年福祉シンポジウム」記録)



年少労働課

資料 No. 132

労働省婦人少年局

55/2

55
年
2
月

は し が き

目 次

勤労青少年福祉シンポジウムも回を重ねて第八回を迎えました。勤労青少年指導者その他の勤労青少年福祉関係者が一堂に会し、当面する問題について研究討議するとともに、相互の連携と親睦を深めるこの行事は、関係者の方々の多大な関心を集めております。従来、シンポジウムのテーマは、「勤労青少年指導者はどうあるべきか」という視点からのものが多かったのですが、本年度は、「勤労青少年は何を考えているか」として現代の勤労青少年の本質を知るためのテーマを採りました。

関係者の方々の明日へのよりどころとなるよう、当日の記念講演及び研究討議の速記録を発行し、参考に供することと致しました。

昭和五五年二月

労働省婦人少年局

昭和五四年度勤労青少年福祉シンポジウム概要	1
労働事務次官あいさつ	2
記念講演「モラトリウム人間からみた勤労青少年」	3
研究討議「勤労青少年は何を考えているか」	19
（各講師の意見発表）	19
（全体討議）	39

昭和五十四年度勤労青少年福祉シンポジウム概要

一 趣 旨

全国の各分野で活動している勤労青少年指導者その他の関係者が、勤労青少年の健全育成や福祉の向上に関し、当面する諸問題について、総合的に研究討議を行うとともに広く意見を交換して相互の理解と連携を深めるため、勤労青少年福祉シンポジウムを開催する。

二 開催日時及び場所

日時 昭和五十四年十一月二〇日（火）

午前 一〇時三〇分～午後四時

場所 東京都千代田区大手町

日経ホール

三 内 容

第一部

開会のことば

労働省婦人少年局長 森 山 真 弓

あいさつ

労働事務次官 桑 原 敬 一

勤労青少年福祉功労者表彰

記念講演「モラトリウム人間からみた勤労青少年」

慶応義塾大学助教授 小此木 啓 吾

第二部

研究討議「勤労青少年は何を考えているか」

司会

読売新聞社論説委員

講師

千葉大学助教授

大阪府立中央勤労青少年ホーム館長

千葉県船橋商工会議所労働係長

社団法人横浜ボランティア協会主事

明星電気株式会社守谷工場新明寮寮長

閉会のことば

労働省婦人少年局年少労働課長

四 参加者の範囲

(一) 勤労青少年ホームの館長及び職員

(二) 勤労青少年ホーム以外の勤労青少年福祉施設の職員

(三) 都道府県、市町村の労働福祉担当職員

(四) 勤労青少年福祉推進者

(五) 勤労青少年福祉員

(六) 勤労青少年福祉団体関係者

(七) その他の勤労青少年育成関係者

加藤 地 三

鈴木 春 男

西山 昭 美

倉 部 佐 和 子

平 野 嘉 昭

津 末 敏 夫

金 平 隆 弘

労働事務次官あいさつ

昭和五四年度勤労青少年福祉シンポジウムを開催するに当たり、一言ごあいさつ申し上げます。

日ごろ勤労青少年の福祉向上のため各方面で活躍されている皆様の御努力に対し、心から敬意を表する次第でございます。

現在働く青少年は全国で約七百万人おり、我が国の産業を支える大きな力となっております。また、日本の将来の更に力強い発展を考えますとき、これら青少年の持つすばらしいエネルギーや新鮮な英知に何よりも大きく期待せざるを得ないところであります。

労働省では、従来から働く青少年の福祉の向上のために各種の施策を講じておりますが、今後とも、勤労青少年指導者の養成、勤労青少年ホームの設置を進めるなど、施策の充実を図りたいと考えております。

本日のこのシンポジウムも、全国から多数の関係の方々、一年一度御参集いただき、働く青少年の健全な育成に関する経験交流の中心的な場としていただくことを考えているところでありますが、回を重ねるに従い充実して参ったことは、まことに喜びに耐えないところであります。

本日御参集の皆様方にはこの意をおくみ取りいただき、働く青少

年の育成の新しい視点の確立等にも積極的な取り組みをお願い申し上げますとともに、働く青少年が心豊かな職業人、社会人に成長するよう、今後一層の御尽力をお願い申し上げます。ごあいさつと致します。

昭和五四年十一月二〇日

労働事務次官 桑原 敬一

モラトリウム人間からみた勤労青少年

慶応義塾大学助教授 小此木 啓 吾

ただいま御紹介がありましたように、今日のお話しのテーマは「モラトリウム人間から見た勤労青少年」ということでございます。

まず、少し私のモラトリウム人間論ということについて御説明を致しまして、その見地から青少年をどう理解していくかというふうなことにしてお話し致したいと思えます。

私は、いわゆる講演調でお話するのは慣れておりません。おしゃべり調でしゃべらせていただきますので、いく分お聞き苦しいかもしれませんが、あしからず。

今日、この会場へ来る途中で、労働省の係の方に伺ったのですけれども、皆様の場合、むしろ私よりもいわゆる勤労青少年の方々に直接触れておられて、特に中卒ないし高卒の階層の方々については、私よりもずっと現実をよくご存じだろうと思うのです。話の仕事は何かと申しますと、信濃町に慶応病院という病院がございますが、その精神科の医者でございます。ですから、いろいろな年代の方にお会い致します。それから、こじっ子から一〇〇メートルぐらい行ったところ

ある大きな銀行がありまして、その職場の精神衛生とか、職場における適応問題とかということも長年やっております。

ただ、今日ここで、お話をすることを引き受けてから考えてみて、少し心もとないと思つたのは、慶応病院へ見える患者さんも学歴階層からいって中卒の方というのはかなり少ないですね。銀行の場合でもやっぱり高卒の方はいらっしゃいますけれども、中卒という方はほとんどいらっしゃらない。今日もここ

に来る車の中で、いったい今、中卒で就職をなさっていらっしゃる方はどのくらいなんでしょうとかいうことをお聞きしたのでございます。一〇パーセント以下ということでございます。中卒と高卒を合わせると半分ぐらいになるのではなからうかというのが、素人の私の感じですよ。先ほどもちょっと伺いましたところ、三八パーセントぐらいは大学へ行くとかで、これはいわば高学歴社会ということの意味しているのだらうと思うのです。

発達心理学で言うと、まず第一に中学生ぐらいの年代、それから高校生ぐらいの年代、

大学生の年代、これは非常に大づかみに言っても、青春期の前期、中期、後期というふうに分かれまして、それぞれの心理学的、社会的な問題点というのは、ものすごく違う訳です。だから、むしろそういうふうな面のことでも少しお話ししなければならいのではないかと、思ってきました。

ところが、もう一つには、同じ年齢であっても学校、例えば高校に行っている場合、大学に行っている場合と職場で働いている場合、それも比較的大きな企業にいる場合もあるし、非常に小さい商店とか小企業の中にいる場合もあるし、それから地域も都会と地方ではいろいろ事情が違ひだらう、そんなことを思っていた訳です。

私は実際の仕事としましては、一人一人の患者さんとかかなり長い時間接触するような仕事が多いのですが、青少年の方に接触する場合はというと、学校に行っている人が比較的多く、次に高卒で仕事をしている人です。学校へ行っている人というと、一番問題が多いのは今の時代では、やはり学校に行かないという、いわゆる登校拒否です。また、多分、中卒で勤めていらっしゃる方の中にも、登校拒否というのではないんだけど、通勤拒否というのか、つまり働くというところについての積極性が見出されないというふうな問題は

学生と共通してあるのではないでしようか。

さて、今までのことは前置きで、これから本題に入りたいと思いますけれども、こういう問題を考えるときには、今の現代社会のどの年代にも共通した現代の人間が持っているいろいろな精神的な問題があると同時に、その中でいろいろなシェネレーションによる違いがあります。最近では、現代社会の問題とか心理学的な問題をお話するときに、どういふ年代の方が聞きになるかによってその反応がすごく違うんですね。例えば、大学の学園祭というのがありますけれども、学園祭でモラトリウム人間の話をする場合と、それから中高年の会社の管理職の方とか、皆様のような御年配の方、御年配と言うと怒られるかもしれませんが、まあ中高年世代の方とお話する場合では、全く同じことを話しても通じ方が違うんです。今日は、大体私と同世代ないしはその上ぐらいの方々が多いだろうと伺っていますので、いくぶんぼつとしてみたのです。そういうふうに、世代によってもものすごく心理学的な状況が違うということがあるのです。

それから、先ほどお話ししたように、同じ年代の青少年の中でも、学歴あるいは職場の性格によっても違ひし、都会と地方でも随分違ひというような問題もあります。

ところで、モラトリウム人間という言葉で

すが、この言葉は今までの話の中のどの辺の人間を対象に生まれたかということなんですけれども、具体的に今は今の大学生ですね。大学生から大学を出る前後ぐらいまでの青年層を中心にまず描き出された人間像でございます。私がモラトリウム人間ということを出しましたのは、昭和四六、七年ぐらい、今から七、八年前なんですけれども、どういふ状況がそのころ起ったかと言いますと、まず、大学紛争というのがありました。大学紛争と前後して、大学の中でどんな心理傾向が見られ始めたかという、一つは、紛争後数年の間にいつの間にか落第という言葉が大学から姿を消したということです。今どきの学生で「私は落第をしました。」というようなことを言う人はまずいない。落第の代わりにどういふ言葉が生まれたかという留年という言葉です。今の学生は、少し試験の勉強が不十分で、まさに昔で言う落第しそうなになると、試験を自分のほうから受けないんですね。受けないと落第ではなくてこれは「僕は留年しました。」という、自分の意思で留年したということになります。今はもう学生で落第という言葉を振り人はいません。

つまり、昔だったら一年遅れたり、試験に落ちたいわゆる落第坊主という言葉があって、

落第ということは恥ずかしいことだったはずなんですけれども、今はむしろ何年も大学に余計いたりすることは、いくぶん格好のいいことにもなっています。それから授業に余り出ないで居ることをいろいろやることも比較的格好のいいことになっています。

特に今の大学ではコピー機械というのが非常に普及しております。大学でたくさん先生に講義をするということは最近では非常に珍しいことになっております。クラスの名簿には一〇〇人とか一五〇人載っていても、出席をとるこわい先生のとときは別ですが、講義を聞くのは一〇人か二〇人というのが大体この大学でも、普通の状態です。なぜこのようになったのかというと、その中で非常によく講義を聞く人がいて、その人たちが講義録を作る訳です。その講義録というのはよくできておりまして感心するようなのがあります。例えば、非常に細かくノートがとってあって、このところは特別注意をしておいたほうがいいのか、注釈まで入っているような、先生のノートよりもいいようなものができる訳です。このコピーを取ったのが一年たちますと大体安くて三〇〇円、高いと五、六〇〇円で売られる訳です。

そうすると学生のほうは、一年間講義を聞いて、ぼんやり一時間半、わかったんだかな

んだかわからないような講義を聞いて、場合によれば居眠りをしたりしているよりも、その間、学校の講義に出ないでどこか喫茶店のウェイターをやったり、あるいはもう少し高級なアルバイトをやった方がよいという訳です。そうすると一日に三〇〇〇円がそこらをかせぐ。そうすると、一年間で五単位とか一〇単位としても四、五万円でコピーを買えば、

差し引きの時間を収入を比べると、それは講義をサガってアルバイトしたほうがいろいろ得になるわけで、これは経済原則であります。一週間ぐらい前にコピーを一所懸命覚えれば、試験は大体通ることになっております。その間にそのお金で外国旅行に行く人もある。少ししかない人はそれで好きなレジャーを楽しむとかと、これが今の大学生の一つの、いわゆるマンモス大学の一つのあり方になっていきます。あるいは、その間にいろいろ特殊な趣味とか、例えばロックバンドに入ってみるとか、特殊技術をやる。

それで、大学の年限がだんだん長くなってきたいて、今、所定の期間に卒業しない人が日本の大学でも二五パーセントから三〇パーセント近くなっています。アメリカやドイツの大学はもともそういう傾向があって、大体五〇パーセントぐらいの人が所定の期間に卒業しない。これは外国の大学は日本とは

有り方が違うのですけれども、日本の場合もそういう傾向が少しずつ出てきている。

また、大学院なんかに入っている学生では理由を聞くと、専門の学者になるために大学院に入っている人はすごく少なくて、学生生活を終わりたくないとか、就職がしたくないとか、社会的に自分の有り方を決めるのがちょっとまだ早すぎると思うから大学院にいるという人が大変増えております。

それから医者さんなんかでも、国家試験は受かっているんだけど、自分は何科の専門医になるか数年間決めないで、一年精神科にいて一年小児科にいてと、できるだけ自分の専門を決めないようにしている人が非常に増えております。

こういう傾向は企業の中にも大卒の場合にはかなり潜在的には増えています。

今のようだが、昭和四七、八年ぐらいから非常に顕著になってきています。特に大学紛争後、いわゆる一九七〇年代になりまして、そういういわば青年階層、特に大卒の青年階層にすごく増え、大学生の間にも増えてきていて、そういう学生や青年たちを名付けて最初私はモラトリウム人間と呼んだ訳です。モラトリウムという言葉が出てきますので、ちょっと御説明しますと、モラトリウムという言葉は、もともと支払猶予期間というより

を意味です。本来は、経済用語として使われていたわけです。例えば、昭和の初期に経済恐慌が起きましたけれども、そういうときに国家がモラトリウムを法律的に発動した。

どういふことかという、例えば銀行に預金者が多数殺到してみんな銀行のお金を下ろしてしまおうと、銀行はつぶれてしまいます。そういうことが次から次へ起こると、社会は経済的に崩壊します。ですから、そういうようなときに債権債務の取引を一時停止する法的処置を取る。それをモラトリウムというふうに言います。つまり預金者が行っても銀行でお金が下ろせない、あるいは借金を取り立てることができない。それによって相手方が経済的に回復して倒産を免れるというように左処置のことをモラトリウムと本来は言っている訳です。

この用語が一九五〇年代の後半ぐらいから社会心理学的な用語に転用されて、モラトリウムという言葉が心理学用語として使われるようになってきたのですけれども、その使われ方というのはどういう意味で使われたかという、つまり、今、申し上げたような大学生ぐらいのジェネレーションの青年というものは、社会から社会心理学的なモラトリウムを与えられている年代であると、こういう意味合いで使われた訳です。二〇歳前後に

れば、知的にも肉体的にも社会的な能力は大人とそんなに変わらない一人前のものになってきているのに、なお二四、五歳までいわゆるモラトリウム期間というふうに社会からは認められているために、例えば自分でお金をかせぐとか、あるいは親を養うとか、税金を払うとか、社会に対してなんらかの義務、責任の支払いをしないでよいということが認められている。そういう年代です。

どうして、そういう猶予期間を与えられた年代といつか階層が社会の中に成立するようになったかと言いますと、これは要するに社会の技術、知識、文化というものが進歩するに従って、昔の古いジェネレーションから若いジェネレーションにいろいろな文化的なものや技術、知識を受け継いでもらわなければならないということが社会的な要請としてある訳です。それを受け継いで研修を受けたり修業をしたりするための期間、いわば見習い期間とか徒弟奉公期間とかあるいは修業期間というものである訳ですが、その期間中はまだ一人前じゃないから、今言ったような支払いを社会に対してする訳にはいかない。モラトリウムというのはそういうことから生まれてきた訳です。

ですから、モラトリウムが終わって一人前になったときに、特殊な専門技術の専門家に

なったりするような職種ほど、このモラトリウム期間というのは長くなります。例えば私は医者ですけれども、医者は社会の中でモラトリウム期間がとてつもなく長い職種だろうと思います。大学は普通よりも二年長くて、昔ですとインターンがあつて無給医期間というのが五、六年あり、通算すると、普通の大学卒の人が就職するのよりもかれこれ一〇年ぐらい一人前にならない期間が更に続くというのが医者の世界の伝統です。

それから法律関係などでも司法修習生とか、ああいふものになる場合にもややそういうことが普通より長くあります。

それはしかし経済原則からいうと、その代わり一人前になるとそれだけの地位とか経済力が得られるから、その間我慢して投資しているということになるでしょうけれども、とにかくそういうモラトリウム期間が長い、専門技術化してくればくるほどモラトリウム期間が長いというようなことが言える訳です。しかも、先進産業社会というのか、現代社会になってくるに従って、ますます、科学技術が高度になってきて、研修を受けて字ばなければならぬものが、技術的な知識面で増えてきております。みんながそういうった研修期間というのか、モラトリウム期間をたくさん持たないといけません。いけないうな社会に、戦

後変わってきました。これが、いわゆる高学歴社会と呼ばれるようなものを出現させてきたということになる訳なんですけれども、とにかく現代社会というのは、歴史的に見て非常にモラトリウム期間を長く取らなければならぬような社会になってきたということが一つ言える訳です。

そういうふうな目で私も昭和四七、八年ぐらいに、そういうモラトリウム期間に安住してしまつて、なかなか社会に出て行こうとしないような青年たちのことをモラトリウム人間と、そのころは言っていたのです。

ところが、昭和五〇年代になりました、もう少し考え方が進んだというのか、変わってきたのは、もっと本質的な問題として、昔の社会と今の社会ということを考える場合に、どこで切るかというのはむずかしいけれども、ここで今、私及びお話しを聞いてくださっている、おそらく昭和一けたぐらいから、あるいは大正ぐらいの世代の方がいらっしゃると思いますのですけれども、そういう戦前、戦中ぐらゐの我々が過ごした青年期のモラトリウムというものと、今の若い人が経験しているモラトリウム期間というものが、心理構造としては、すごく違つてしまつていゝのではな

今までの話がモラトリウム人間の説明の第一歩だとすると、これから第二部で、いわば現代的なモラトリウムと古典的なモラトリウムの違いというような話をしたいと思います。

これは私自身の個人的な体験ですが、私が今の家内と結婚したのは、医学部を出てインターンが終わるころでした。インターンが終わると精神科の教室に入る訳ですが、その当時ですと学位を取るまでに六、七年かかり、その間大学では全く無給なんです。内職ぐらいはできるのだけれども無給です。家内の父親に会った時に、「あなたはこのから娘と結婚してどういうふうに暮らすのか。」と聞かれ、「当分まだ六、七年は収入はあまりないと思いますけれども・・・。」というようにことを言ったら、家内の父親は実業家なものですからびっくりしてしまって、「あなた、結婚しようというのに収入が入らないということを平気な顔をして言うけれども、どういうことなのか。」と言うから、「いや、医者の世界ではそれが当たり前でして、一人前になりたければ当分は無給でいるほかないのです。」という話をしました。

医者の世界では、野口英世型の生き方というのか、金持の娘と嫁組みをして学費を出してもらうとか、頭のいい人は開業医の娘と結婚するとか、又は、『滝の白糸型』なんでの

があつて、お金をだれかに貸いでもらうとか、それから、『婦系図型』で、好きな女性も一人前になるためにはあきらめるとか、いろいろな生き方があります。

ここにいらつしやる方には、『婦系図』とか、『滝の白糸』と言つても通じておりますでしうね。学園祭で、『滝の白糸』とか、『婦系図』と言つた時に、試みに一五〇人なり二〇〇人いる学生に「知っている人」と言つても、せいぜい一人か二人ですね。水谷八重子と言つても知らない人は随分います。水谷良重のお母さんであるとか、玉三郎の養子先のお父さんの奥さんであるとか言うともんなわかわかるのですけれども。お宮、貫一は大体知っているんですね、『金色夜叉』は。なぜ知っているかという、あれはよく漫画に出てくるからとか、ドリフターズがやったことがあるとか、こういう訳で、その文脈はよくわかりません。それで、何を今、言っているかという、つまり私の青年期にはこういう考え方があつた訳です。まず一人前になるまでに修業をしたり研修を受けている人間は半人前であることはしかなかった。その場合には、ある程度好きな女性もあきらめなければならぬこともあるかもしれないし、人に頭を下げることもしかたがないし、教えてもらう人には一応敬意を表する。それから、そういう半人前意

識として、場合によればでっちとか徒弟奉公と言われるように、教わるためにはいろいろなことを我慢しなければならぬという心理構造があつた訳です。

例えば、戦前や戦中には、大学生が電車で腰かけていて、目の前に年寄りが立っているなんてことがあつたならば、「大学生のくせになんだお前は。立て。」と年寄りの人に言われることがありました。「そもそも学生の分際で」という言葉が昔はあつたんだとか、「若い者のくせに」という言葉が頻りに使われたことがあるというように話を大学生にする、江戸時代のお侍の話でも聞くような顔をしてみんな聞いている訳です。つまり、そういう感覚というのは今の人にはない訳です。古いモラトリウム時代の人間というのは、修業したり勉強したりしながら、自分はまだモラトリウムにいるのだから、社会に対して一人前じゃないんだということを、絶えず困りから言われ続けるし、自分もそう思っていた。だから我々の助手時代なんていうと、こういうふうな謙遜をだれか偉い先生がすると、そばには何人も黒板ふきがいて、黒板をふくところ、お役所にはまだそういう精神が残っているのでありまして、本日、ここでお迎えの車を降りましたら役所の方が「お荷物をお持ちしましょう。」と言つてくださった

ので、久しぶりでそういう経験をしましたけれども、今の大学の学生にはそんなことは逆立ちしてもありえないことであって、つまりそういうものが全くなくなっています。

また、例えば、講義をする先生が一〇分、一五分と遅れば、たちまち教務に連絡があって、「某先生は講義に遅れた。」とか、あるいは「講義内容が悪い。」とか、「面白くない。」というようなことを学生からチェックされるんですけれども、逆に、学生が遅れたり休んだりしても、あまり先生はチェックすることはない。最近はこちらと良くなりましてけれども、ひところは、朝講義を始めてみると、目の前の学生が牛乳とパンを出してむしゃむしゃ食べている。「すみません、ちょっと腹が膨れたものですから。」と、パンを食べながらだって講義を聞いてやっているのだからいいじゃないかという感じですよ。講義の途中でゆいゆうと女の子が迎えに来て教室から出て行ったり、また別な男の子が入ってきてみたり、いろいろなことが起こります。

医学部では比較的にそういうことは少ないけれども、もっと大きな教室だと、教授が講義をするため教室に入ったら、男の子と女の子がつかみ合いをやっている。そのうちに「先生、助けてください。」と女子学生が言うから、「どうしたんだ。」と言ったら、「

温泉マークに連れ込もうとこの人は私のことを誘っているのですけれども、なんとか先生助けてください。」と言うので、講義をするどころではなく、その男の子から女の子をかばったところが、男の子が「なんだお前は、人の恋愛の自由を妨害するのか。」と言って怒ったとか。そんなようなことはけっして冗談ではなく現実になっているのが今の大学のキャンパスであります。

そういうことで話は前後しましたけれども、現代の若い学生のモラトリアム経験というのはどういう経験かというと、昔のよりを書生さんとか半人前とかという経験がまずない。経済的にも、社会人に比べればお金が少ないけれども、一応、昔に比べると経済力もあるとにかく学生のアルバイトは重宝がられ、結構いい収入になります。少し能力のある学生で、特に英語なんかできますと国際電話の夜間交換手とか、いろいろと仕事があります。それから、深夜放送のような正規の職員の使えない深夜の仕事などはみんな臨時雇いで学生を使いますから、結構いい収入になります。そういうふうなもので食いつなぎながらというか、暮らしていくというのは、気楽でいいもののようです。

それから更に、地方から来ている女子学生と男子学生が、下宿代やアパート代を二人分

払うのを一つにすればそれだけ浮くというようにを訳で、卒業するまでという約束で同棲するというのが最近是非常に多いようです。そして、これと卒業後の結婚は別というふうな協約を結ばしんですが、実際にはそのまま結婚する人が結構いるようです。

大体、今の学生は一对一だけというのは非常に少ないですね。結婚する数箇月前まで、いったいどちらと結婚するんだろというふうなのが男でも女でもいて、複数になってしることが多いのです。

そういう訳で、昔は男女問題なんかも禁欲的であったのが、今の若いモラトリアムの世代は自由である。それから経済的にも、いわゆる社会で働いている人よりも日銭が入るといいうのか、独身貴族という言葉もあるけれども、比較的ゆとりがあります。

それからもっと本質的な問題は、社会意識が変わってしまったって、教育を受けたり研修を受けたたりすることが、一つの自分たちの権利であって、これは社会の必要の一つの寄与なんだ、つまり、社会が文化・技術を継承していくために必要な投資なんであるという考え方を青年がみんな持ってしまったって、だから、これは別に自分たちがひけめを感じる必要はないんで、これがなくなれば社会は崩壊してしまうのだから、これは一つの仕事と

同じようなもので正当なものだという考え方をみんなが持っているということです。

この考え方が極端になりますと、ある話として、小学生の子供が真面目にこういうことを親に言う。「どうして学校の先生は学校で自分たちを教えているのに、それで給料をもらっているのか。どうして、自分たちはいやなのに行きたくなくて、朝からずっと机に座って先生の話を聞いているのに給料がもらえないのか。」と。これを深刻に悩む。皆さんはこれに答えることができるでしょうか。正確に。そして、「私たちは遊ぶのを一所懸命我慢して話を聞かされているのに、先生はむしろ楽しそうに顔をして講義をしている。それなのに、先生は給料をもらって私たちは給料をもらえないのは、随分不合理だ。」この考え方が今の大学生の考え方でもある訳です。今の大学では、教えるからとか、教わるからとかというところで心理的な人間関係に上下をつけたり、それを恩に感じるとかと思うことは絶対的なタブーになっております。教えていることで相手に負い目を感じさせない。学生の方は講義料を月謝として払っているわけですから、こちらが教えてあげているなんているふりに思ふものなら、大変な錯覚であります。つまり資本主義の原則から言うと、こっちが雇われている訳ですから、評

判のいい先生というのは、そういう若い人の気持をよく心得ている人です。だから、今どき教えてやっているんだとか、おれは先生なんだから、お前たちはおれに敬意を表せとか、そういうふうな意識で接したら、大抵「あの先生はちょっと遅れているなあ。」ということになってしまいます。遅れているというより言葉ならまだいいけれども、みんなに毛嫌いされたり、鼻につく人だと言われたりしてしまふ。

そういう意味でも、教わることでか、研修を受けることでか、そういうものの意識が大学紛争前後を期して、急激に変革されているということが大学の中では起こっています。普通の社会意識では、大学紛争も無事に治まって、結局ニューレフトや過激派も無事に終わって、世の中は平和になったというふうになっていきますけれども、あの当時、一九六〇年代のいわゆる文化革命なるものは、まさに人間革命とか文化革命と言われるように、けっして権力的な意味の機構の革命ではないのであって、意識革命でした。その意識革命というもののすぐ大きな要素が世代間の抗争です。つまり、戦争体験のあるいわゆる我々中高年世代と戦争を知らない世代、いわば戦後の米国的な民主主義教育によって人と成った世代との戦いだった訳です。そして、若者の勝利

は確実なものとなりつつあり、心理的な革命は成功したと言えるだろうと思います。

その意識革命により変わってきたことの一例を挙げれば、ヒッピーというのがあります。ヒッピーの思想で約束というのを例にとって話すならば、守ることを前提にして約束するのが普通である訳ですが、彼等の約束というものは破る自由を含んだ約束でなければ約束とは認めない。わかりますか。例えばデートをするといいます。「あしたの夜、どこで会いましょう。」という約束をしたとして、その時、来なかったらお互いに相手責めたり怒るというのなら、そんな約束はしないという訳です。その時に気が変わってその場所に自分が現われなかったら、いやになったんだということと、それでその約束は解消という、そういう自由をお互いに認めたのでなければ約束をしないというのがヒッピーのデートなんです。だから、その時気が変わったらほかの男の子のほうへ行ってしまいい約束の方へは行かないやいんです。そうすると相手も、ああ来ないからもうこの約束はバーだなと思って、その約束は終わりにすればいい。こういう約束でなければ約束をしないというのが、ヒッピーの約束だったのです。

今の大学でこういう話を学生ばかりいたところである時に、まず大変なのは、ヒッピー

てなんであるかというのを説明することです。というのは、今のようなことを話してもどこが変わった話なのかよくわかってもらえないのです。具体的に服装の説明をする時にも、ここにいる方はさすがにほとんどネクタイに背広ですけれども、これが大学だったらどうなっているかという、みんな男の子も女の子もパンをはいたりTシャツを着たり、長髪だったりひげをはやしたり、制服というのがないのでいろいろな格好をしています。ヒッピーの話を一所懸命にいてちょっと見たら一五〇人も二〇〇人も目の前にヒッピーがいるというのが今の大学なんです。

慶応の学生と教師の会へ行った時のことです。私は体育会、運動部に入っているような古典的というのか、タイムマシーンで間違えて生まれたような人間ですけれども、どうぞよろしく。」というようにあいさつが学生からありました。どういうことを意味しているかという、今の大学ではいわゆる体育会、運動部、例えば野球部にしても庭球部でも、ああいうところへ入る人というのは、右翼かあるいは変わった人なんです。どうしてかという、朝からあんな激しい訓練を受けて休んだりするとたちまち制裁を受けたり、やる時にはリンチを受けるというように、ああいう組織の中に入る人間はやくざか右翼か

それでなければいざなわれた人間だという訳です。そういう思想がみんなにある訳です。だから運動したければ同好会というのに入る。慶応にはテニスの同好会だけで百何十とあります。テニスコートが借りられて、男女が自由に付き合えて、いやにすればやめればいいし、行きたい時に行けばいい。今、大学とか病院でもそうですけれども、そういう若い人と一緒に仕事をやるうとする時は、こういうポーズを取らなければなりません。つまり、やめなければいつやめてもいいです。例えば、一年間ある研究を始めようとする時に、昔だったら一つ研究グループを作ったら、身銭を切っても粉骨砕身してとにかくやり通そうというような、大松監督じゃないけれども、なせばなる。」というのが我々の精神ですが、今の人たちには、「いやになつたら辞めてもいいです。デートに行きたくなつたらいつでも行ってください。あなたの人権を認めます。私のことが嫌になつたら、いつでもほかの先生のところへ行きなさい。」、そういうことを繰り返して繰り返す言う。そうすると人がたくさん集まるのです。最初から「やる以上は責任を持たせて最後までやり通させるぞ。」、なんという二、三人しか集まらない。それが大體特徴ある心理構造なんです。

それで面白いのは、いつでも辞めていいと

いったからといっても、実際にはみんな辞めちゃう訳でもないし、サボルわけでもないんです。そういうふうにするう人の中に自分がいるということ。自分で自分が保たれているところがあるのです。頭から「絶対に来い。」とか、「サボったら厳罰だ。」とかいうようなところに自分が行くこと自体が、今の社会意識に反することになるんでしょね。そのようなことが、一九七〇年代になって学生や若者の共通した意識になってきたということが、どうやら言えるようなんです。このことも、今まで申し上げたように、モラトリウムというものの社会の評価が変わってしまい、そして本人が経験する意識が変わってしまったということになるものです。

第三部として、社会的な要因と言いますか、それをもう少し一つ一つ取り上げてみなければならぬと思います。

第一に言えることは、資本主義が生産的な資本主義の段階から、消費資本主義と言います。消費というものを絶対的に優先しななければならぬ時代に、少なくとも先進国においては、なつてしまったということです。現に、今起っているいろいろな経済問題においては、物をいかにたくさん作るかということではなくて、だれに買ってもらうかということが中心課題になっています。まさに消費者

は神様でありまして、それがあらゆる生活局面に行きわたっているわけです。今の社会の人間というのは、大体が、働くことや生産することよりは消費するほうに生きがいを感じるようになるざるをえないような構造になってきています。

消費が優位に立ってくると、旧来の社会と全く違った心理的構造が成立します。今までは、実際に物を作り出すというよりな仕事をしている人が優位に立つという人間観が社会を動かしていました。例えば、働かざる者は食うべからず、というのは、働く人間が偉いということです。働くことによって社会は成り立っていて、働くことに価値があるということです。しかし、今の時代はそうではなくて、働く人も消費する人も人権において同等であるということを社会意識として表看板にしなければ総理大臣には絶対なれない時代です。社会福祉国家というのがそういうもののなのです。

だから、例えば寝たきり老人であっても、身体障害者であっても、労働省も身体障害者の雇用促進ということに努めておられますけれども精神障害者であっても、それからだんなさんの帰りを待っている家庭の主婦であっても、親から仕送りされてのんびりとモラトリアムを楽しんでいる大学生であっ

ても、全部これは消費者としては同等なんです。どんな人でもデパートに入ればお客様として最敬礼される訳です。そういういわば消費者民主主義とでもいうものが徹底してきたということです。

そうすると、働いている人、あるいは生産している人、社会の運営者である人と先ほどの人たちが同等になっているということは、逆に言うとう、働いている人や生産している人は、とてもつらい思いをすることになります。これは家庭でも既に起こっていることと思います。昔のように、「なんだお前はおれに養ってもらっているくせに、偉そうなことを言うな。」などとお父さんがお母さんに言ったりしたら、家族中からたたかれると思うのです。つまり、妻と夫は同等であって、「おれに養われているから文句を言うな。」なんてことを言うだんなさんは若くなればなるほど少ないと思うのです。

これはしかし、表面から見ると人権尊重でよいように見えるけれども、裏から言うと消費者階層をできるかぎり拡大していかなければならない資本主義の論理の徹底であります。悪く言えば、社会福祉の予算がどれだけ取れるかということが財界から見れば、福祉予算で購買力がどれだけ高まるかという計算でしかないというように、そういう部分も一部に

はないとは言えない訳で、そういうのが今の資本主義の機構です。そういうところから若者が消費者としては昔のようなひけめを持たないでよいというふりなことが起っています。

そういう意味からいうと、社会からいわれる猶予期間を与えられて義務支払いの決済を求められない階層、今までだったら一人前の発言権がないし、同等でなかったと言われていた階層、例えば家庭の女子であるとか、老人であるとか、社会福祉の対象になる方々であるとか、そういう人たちの意識がむしろ構造的には優位に立ってしまったようなところがあります。

例えば、これは新聞の論議を御覧になればおわかりのように、一所懸命政治とか天下国家に尽くすような人、あるいはお役人、あるいは社会で責任を持っている人というのは、大体においてどういうわけか愚玉扱されるのです。大体そういうものなんです。何か一所懸命やっている人というのは、裏で利益があって権力があるからやっているに違いないと、こういうふうになる訳です。それに依存して暮らしている人は弱い者で、被害者でかわいそうだから擁護しなければならぬと、こういうマスコミの図式というのが出来上がっている訳です。これはもちろんある面では必要なことですが、やや誇張されすぎてしまうお

それもあります。とにかく今の社会は、大人として何か自分というもののアイデンティティを持って生活している人間よりは、そういうものをあえて持たないで、モラトリウム状態に在る人間のほうが、心理的に優位に立っている状況であります。そこで私は、現代の社会はモラトリウム人間の時代だということを言っている訳です。

そこで最後に、アイデンティティということについてですが、モラトリウムという言葉とアイデンティティという言葉とは、ペアになっている言葉であります。アイデンティティというのは、モラトリウム期間を脱却して、特定の人と結婚して自分の家庭を持って、子供ができて、特定の職場や人間関係があって、それをよりどころにして一生を送るというふうに自分というものを確立することを意味する言葉です。昔の社会においては、そういうアイデンティティをきちんと持つ人間を大人と言った訳です。

ところが今の社会というのは、アイデンティティを確立して生きていくということが、いろいろな意味でかなり困難になってきています。昔だったら学校を出て一つ選んだ仕事を定年まで続けて、あとは隠居すればいいというよりな人生設計で、単純にアイデンティティを持ちやすかった訳ですが、今は御承知のよ

うに平均寿命が八〇歳近くになり、五五歳の定年ではまだ人生の半ばであって、今持っているものが絶対のものではなくなるといふうにライフサイクルの有り方も変わってきています。八〇年間生きるとなれば、二度ぐらいいは配偶者を替えなければならぬとか、あるいは仕事を何回も替えなければならぬというようなことが出てくる可能性が高くなってきました。そうすると、若い人が自分の人生を設計するときにも、昔の我々が設計したときとはかなり違った設計をしていかなければならないということです。ちなみに米国では既に離婚率が五〇パーセントを超えています。

私の調べたところでは実質的には七〇パーセントから八〇パーセントという離婚率に達しているところもあって、結婚というこの意味合いもすごく変わってきています。日本がそこまでいくとは思いませんけれども、アメリカの若者はそういう時代を迎えています。そういうふうな意味において、我々中高年世代が経験している精神生活というものと、今の若者が経験していく精神生活や人生というものは、かなり異なるものを入れて考えなきゃならぬくらいに違ってきている部分があるんじゃないかと思っています。

今までの話はどちらかというと、大学生をモデルにお話ししましたけれども、基本的な

心理的傾向というのは、大学生のみならず、高卒者、中卒者にも、若者全体に広がっているのを見て差し支えないだろうと思います。ただ、企業では大学生よりは高卒者のほうがこの傾向がずっと程度が軽くて済んでいるというのが、企業の管理者たちの認識であって、むしろこれからは大卒よりも高卒のほうが頼りになる時代になってくると、極論を言う人もいます。

今日の話はどちらかというと、社会論の立場から話を致しましたけれども、実はこのモラトリウム人間論というのは、私の一種の副業であります。私の二、三年先輩の北杜夫という人が慶応の精神科にいますが、彼のようにな小説を書くほどのことはないけれども、彼の小説と同じような意味で私はモラトリウム人間論というのを書いています。私の本職は精神科医でありまして、本当はその方面からのお話をすべきだったのかも思っています。と悔やんでおりますが、それはまた別な機会にさせていたただきたいと思っています。

そして、最後に、今までの話からは、今の若者が本当にモラトリウム人間で困ったものだが、我々は中高年世代でそうじゃない古い生活意識を持っている人間だというふうになる訳ですが、実はそう思っている我々自身も、戦前の日本人と比べますとモラトリウム人間

的な心理構造をより多く享有していると言えるのではないかと思います。そこで、我々中高年と青少年とのかかわり方というか、コミュニケーションというものを考える場合に、ハト派とタカ派とに分けてみますと、ハト派というのはどういうのかというと、自分の青少年時代を心の中に思い出し、それと今の青少年を同一視しながら、若者の側の気持ちに共感しながら若者にかかわるのがハト派です。特に自分の中のモラトリアム的な部分を思い出しながらかかわる。それに対して、タカ派というのは、そこを切り捨ててしまつて、今の自分の意識だけで青少年とかかわるのがタカ派です。実際のところは、青少年にかかわるのにはこの両面が必要のように思います。つまり青少年を現実の社会の厳しさに触れさせるときには、余りものわかりが良すぎると、現実を見失わせてしまうことになるので、ある程度タカ派的な面も必要ですし、また先輩として相談のつたりするときには、むしろハト派的なかわりも大切ではないかというようなことを思っている訳です。

予定の時間になりましたのでこれで終わります。御静聴ありがとうございました。

拍手

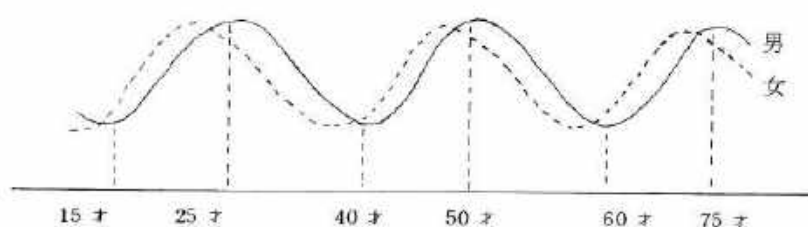
勤労青少年は何を考えているか

千葉大学助教授 鈴木 春 男

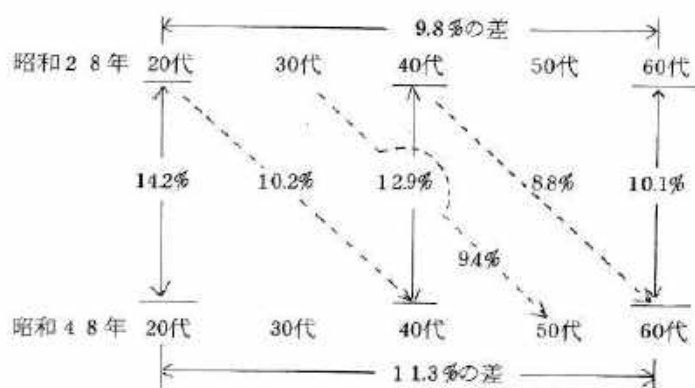
1. 勤労青少年の位置づけ

ゆとりの時（経済的、時間的）であり、意見態度形成の時である。

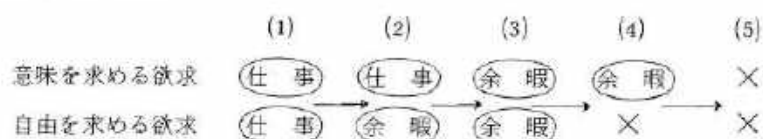
〈栄華の峰と貧乏の谷間〉



〈意見支持率の変化〉



2. 勤労青少年の二大欲求の充足の場面が仕事から余暇へ移り、さらに余暇の中でも満たされなくなりつつある。



3. 余暇を楽しむための障害要件と動機づけ

勤労青少年は、お金や時間の不足をすぐあげるが、むしろ「余暇を楽しむ気持ちさえ起らない」という答の比率が低いことこそ問題ではないか。

〈障害要件〉

余暇を楽しむ気持ちさえ起らない	6.6%
何をするか考えつかない	12.2
時間が足りない	66.6
お金が足りない	70.9
仲間がいない	16.9
施設場所が近くにない	40.0
用具がない	7.4

〈余暇運用のタイプ〉

人に誘われて遊ぶ方だ	28.2%
暇つぶしのために遊ぶ	28.5
やりたいことを積極的に選んで遊ぶ	30.7
遊ぶために暇をつくる	9.3
その他・不明	3.4

1. 私の考察の対象となった

「考えている」人達の範囲と特徴

2. 「考えていること」の探し方

- 面接雑談、アンケート、企業調査情報
(生活の理想、関心のある言葉、満足内容 e t c)
- ホーム生活を通して
(講座、グループ活動、事故対応、募金活動、福祉施設訪問 e t c)
- 他ホームの資料

3. 「何を考えているか」で取上げた項目別の収穫とその説明

- 生活面 ○倫理、規範 ○義務感責任感 ○世代感覚の差 ○小集団活動 e t c
(平均的思考と平均化意識 — 正義 — 自分の意思の尊重 — 反他人の目中心 — 安定性
願望、説得と理解 e t c)

4. 「考えていること」とホームの係り合い

5. 補 遺

国民的等質思考、思潮の特徴 e t c

コントロール・ファクター、政策ニイーズ

1. 点 数 人 間
知識と知恵は違う
2. 不適應からの出発
お子様ランチじゃくい足りない
3. 自己の発見
与えられ過ぎの欲求不満
4. 行動への展開
何かを自分の手でつかみたい
—— ロマンを求めて ——

ボランティア活動にみる勤労青少年気質

(問題点)

1. 活動の主体者になろうとしない青年
 - 趣味活動は大いにするが、奉仕活動などに代表される社会的活動には関心がない。
 - 自己と社会とのかかわりを考えることがない。
 - 様々な活動について自らが能動的に働きかけようとする意志がない。
2. 一生懸命模索はしているが、なかなか自分の生き方、生きる目標が見出せない青年。
 - 情報量の過多からくる、様々な欲求。
 - 自らの力で何かを創造していく行為、経験の欠如。

(課題)

3. 我々はこれらの問題にどう具体的に対処していくべきか。
 - 青年と共に考え、悩み、学習し、働く場面を多く作っていく。
 - 青年の興味、関心をいかに社会的なレベルまで伸ばしていったらよいか。

勤労青少年は何を考えているか

司会 読売新聞社論説委員 加藤 地 三
講師 千葉大学助教授 鈴木 春 男
講師 大阪府立中央勤労青 西 山 昭 美
少年ホーム館長
講師 勤労青少年福祉員 倉 部 佐和子
講師 社団法人横浜ボランテ 平 野 嘉 昭
ィア協会主事
講師 勤労青少年福祉推進者 末 敏 夫

加藤（司会） ただいまから第二部の研究
討議に移りたいと思います。私、ただいま紹
介されました司会の加藤でございます。去年
も一〇月二五日にこの日経ホールでシンポジ
ウムがございました、司会を務めさせてい
ただきました。

お手元のしおりにございますように、今全
国の勤労青少年は、五三年の「労働力調査」
によりますと、約七〇〇万人ぐらいいるわけ
でございます。この勤労青少年たちが何を考
えているかということが今日のテーマでござ
います。たまたまこのしおりの2のところは
「青少年における期待の実現」という総理府
の「組織で働く青少年の意識調査」五一年度

のデータが簡単に載っておりますけれども、
これをちょっと見まして気がついたことは、
日本の青年はアメリカとかイギリスの青年に
比べて就職前に期待したことが就職後実現し
た割合が大部分少ないということが特徴的で
ございます。特に、「そこに勤務することによ
って自分の将来が開けること」という区分を
見ますと、日本はたった二六パーセントしか
いない。アメリカ、イギリスは六・七パー
セントでございます。日本の勤労青少年は期
待をもって就職するけれども、その期待が必
ずしも実現されたとは思っていないというよ
うな意識をもっているのではないかと思いま
す。

御承知のとおり、最近の勤労青少年は生き
がいがなかなか得られないということを申し
ているようでございます。生活環境の急激な
変化がみられまして、農村から都市へという
ような人口移動もございまして、個人の意識
が大変変化してまいりました。そういう中で
若者たちは不安を抱えておりますし、働くこ
との意味がわからない。就職してもなか／＼
生きがいが得られないというようなかで成長
しているんだと思います。したがって、皆さ
ま方のお仕事も、今までは労働条件を改善

するということ、あるいは余暇時間の
有効利用などでその大半は済んでいたと思
いますけれども、現在あるいは将来の皆さま方
のお仕事というのは勤労青少年一人一人に個
人的接触を図りながら彼らの悩みを聞いてや
って、どうしたら働きがい、生きがいを得ら
れるか、また人生はどうあるべきかというよ
うな人生論などについてもお互いに話し合う
機会がないと、なか／＼いい働く青少年にな
らないということが多くなってきたとい
うんだと思います。

そういう意味で今年度の研究討議のテーマ
が「勤労青少年は何を考えているか」という
ことになったんだと思います。

それでは、講師の先生方の意見発表に移り
ます。最初お一人一〇分くらいずつお話し願
いまして、その後補足の御意見を三分ぐら
いづついただこうと思います。発言の順番は、
この名簿にありますように皆さま方から向
って左側の鈴木先生から順番にお願いするこ
とに致します。

それでは、千葉大学の鈴木先生どうぞ。

（各講師の意見発表）

鈴木（講師） 私、千葉大学では産業社会
学というのを教えておりまして、いわゆる産
業という集団における人間関係を研究してい
る学者でございます。

実は、私、育った環境が中小企業でござい

まして、私は長男でございましたので、本来ならば中小企業の経営者になっているはずな
んでございますが、ひょんなことでこんな道
に入ってしまったわけでございます。そうい
うことで、実は中小企業には多少関連ある生
活を送っているわけでございます。

時間が限られておりますので、お手元にあ
る資料（後頁のレジメ参照）を見ていただき
ながら一〇分ほど私の考えをお話させていた
だきたいというふうに思っております。

私は、まず最初に勤労青少年というのはい
ったいどんな人生における位置づけになるの
か、このへんからお話を進めさせていただき
たいと思っております。お手元に波型の図が
あると思います。これは戦前の社会学の業績
なんでございますが、鈴木栄太郎先生という
大塚社会学では偉い先生がいっぱいしまし
て、この先生の著作に「日本農村社会学序説」
という本があるんですが、その中で実は鈴木
栄太郎先生が、実は同じ鈴木でも私とは一切
関係のない鈴木先生なのですけれども、人生
には非常に豊かな時期と、それから非常に貧
しい時期とがあって、これが二五年周期でや
って来るといふ説を挙げられているわけです。
鈴木先生の説によりますと、お手元の図で実
線で書いてあるのが男性で点線が女性なので
ありますが、二五歳の男性がまあ言ってみれ

ば非常に生活的にゆとりのある時期で、それ
が四〇歳になりますとこれが最低の経済的な
ゆとり、つまり最も生活の苦しい時期になる。
更にそれがまた一〇年ほど経ちましてさきほ
どの二五歳から二五年経った五〇歳になると
非常に豊かな時期になる。大体こういう波型
を描いています。女性がそれから五歳遅れて
おりますのは、ちょうどこの本をお書きにな
った昭和一七ごろは、女性と男性の結婚年
齢が五歳ぐらい違うということによって、こ
ういう差になったんじゃないかと思ひんです
けれども、そういう図がございます。

その当時は直系家族と言いますか、何世代
もがいっしょの家に住むという時代だったわ
けですが、現在は核家族がかなり進んでおり
ますので必ずしもこの線が当るかどうかとい
うことは、もう一度検討しなくてはならない
わけです。いずれにしても二〇歳ないし
二五歳前後というこの時期は、人生のライフ
サイクルの中においてもかなり豊かな時期だ
ということが一つ位置づけされるんではない
かというふうに思ったわけでございます。

それともう一つ、私はその下に「意見支持
率の変化」というのを載せております。これ
は統計数理研究所というところで昭和二八年
と昭和四八年と全く同じ質問票で同じ調査を
やったわけなんです。その調査の中で二〇代

の人、三〇代の人、四〇代の人、五〇代の人、
六〇代の人というふうに年齢層を分けまして、
その年齢差によってどのくらい意見の差があ
るかということを、すべての質問をトータル
して調べてみたんです。そうしましたら、昭
和二八年の段階では二〇代の人と六〇代の人
の意見の違いというのは九・八パーセントで
した。ところが四八年になりますと、二〇代
の人と六〇代の人との意見の違いは一・三
パーセントに広がった。だから、その年齢に
よる差というものが二〇年経つうちに少し広
がったということがわかったわけでございま
す。

それともう一つ、二八年と四八年を比べて
みますと、二八年の二〇代は四八年にはこれは言
うまでもなく四〇代になっております。その
二八年に二〇代であった人が四八年に四〇代
になることによって、その人たちがどのくら
い意見が違ったかということを見ましたら、
点線で結んであるように一〇・二パーセント
の意見の違いが出たわけでございます。

ところが、それぞれ三〇代は五〇代になり、
四〇代は六〇代になるわけです。もう一つ二
八年の二〇代と四八年の二〇代、二〇年後輩
になるわけですが、その人とは比べてみたら
どうかというと、一四・二パーセントの意見
の差がある。この数字をどういうふうに見る

だらいいかという考えをわけでござい
ますが、私は次のように解釈したわけ
です。それは、二〇代のように解
釈したわけは、二〇代に持った一つの意識とい
うのが、四〇代になることによって、つまり
二〇年経っても一〇・二パーセントしか違わ
ない。ところが同じ二〇代でも二八年の時の
二〇代と、四八年の時の二〇代とは一四・二
パーセントも違う。つまり、二〇代——ここ
で今日おそろくわれわれが問題にしなけれ
ばならない世代だと思ふんですが——そういう
世代が持った一つの意見というものは、その
人が三〇代になり四〇代になり五〇代になっ
ても、人生の各年齢においてそういう一つの
意識というものは、かなり影響がある。その
意識というのはかなり固定的なものと理解
することができないだろうか。そうすると、
二〇代というのは片方で非常に豊かな時期で
ある、特に二〇代の前半あたりは非常に豊か
な時期である。その豊かな時期に得た一つの
生き方、あるいは意識がその後の人生をかなり
決めていくものだ。つまりその意味で勤
労青少年のこの時代というのは、人生におけ
る重要な一つのポイントだということを、ま
ず我々は意識しなければいけないんじゃない
かと、こんなことでお手元にある数字を挙げ
てみたわけでございます。

その次に、次のページにわたって申しわけ

ないんですが、特に仕事と余暇ということに
ついて、勤労青少年がいったいどんな考え
方を持っているんだろうかということ、少し
図式的にながめてみたわけでございます。こ
れは勤労青少年だけに限られた問題ではない
と思ふんですけれども、私どもがいろいろ調
査をやりまして、やはり人間として一番強い
欲求というのを考えてみますと、どうも、自
己を確認したいというか、ここでは意味を求
める欲求と書いていますが、何か意味のある
ことをしたいという気持と、それからもう一
つは自由でありたいという気持ではないかと
思ふのです。この自由を求める欲求と意味を
求める欲求というものが、もちろんたくさん
欲求にはございますわけですし、マズロー注
(一)なんかも五段階説なんているのを挙げてい
るわけですけども、何が今大事かというと、
この二つではないかと私は思います。

その場合に、この(1)というところなんです
が、本来私どもは仕事の中で意味を求める欲
求と自由を求める欲求とを、共に満たしてき
たんじゃないかというふうに思ふんです。と
ころが、だんだん社会が進歩し、組織が大き
くなり、そして私どもの専門的用語で言え
ばいわゆる官僚制化ということが進むに従
いまして、自由を求めるということが仕事の
中ではなかなかにできなくなる。どうしても仕事

というのは拘束されたものになり、いわば上
司から命令されたことをそのまま実行せざる
を得ないというような状態になってくる。そ
うすると、意味を求める欲求のほうはこれは
仕事で達成できる。しかし、自由を求める欲
求は仕事では達成できないために、余暇の場
面でそういう欲求を満たそうという考え方が
強く出てきたんではないだろうか。ここに、
いわゆる仕事と余暇というのを分離して考
える考え方というものが一般化してきたの
ではないだろうか、仕事と余暇とはやっぱり違
うんだという考え方が一般化してきたんじや
ないか。

ところが、最近の傾向を見ておきますと、
その意味を求める欲求すら、その仕事の中で
失われつつある。つまり、我々は仕事の中で
これはおれがやった仕事だぜという、そうい
う確認というのはなかなかにできなくなっ
てくる。仕事が細分化され、しかもその製品とい
うようなものが目に見えないような状態、言
ってみればその計器だけ見て、判断する業務
なんていうのを見えていますと、本当に仕事の
喜びというのとはどこにあるんだろうかとい
うふうに考えざるをえないような状況という
のが、非常に進展しているわけでございます。
そうしますと、仕事はいわば余暇を楽しむ
ためのものであって、ある意味では必要悪

たいな状況になってしまふ。それでは、仕方ないから、余暇の中で意味を求める欲求と、自由を求める欲求とを共に満たそうという考え方が出て来る。ところが、今度は余暇自体の中から、例えばバック旅行だとか、あるいはマスコミがいろいろこういうレジャーがあるなんていうのを出すと、それを楽しまないでバスに乗り遅れるみたいな心境にみんななっていくなんていう現象を考えますと、この自由を求める欲求は今度は余暇からも失われる。余暇ではせいぜいいわば意味を求める欲求だけを充足せざるを得ないというような状況になってくる。ところが、次の段階においては、おそらく、余暇の中からもこの意味を求める欲求すらなくなっていくというようなことが出てきそう。先ほど加藤先生のお話にございましたとおり、まさに「おれが生きている目的は何だろうか」というような人間がどうもこの余暇と仕事を分けて違うものだというふうに見ていくと、そういう状況というのが必然的に生まれざるを得ないんじゃないかという心配が私にはあるわけです。

後でまたいろいろお話があるかもしれませんが、私は結論として、仕事と余暇というものを分離して考えていくのではなくて、もつと混ざったもの、仕事と余暇が並列的に同時に協同していくような、そういう状況というものを一つ考えなくてはいけないんじゃないかというふうに、考えております。

第三は勤労青少年が余暇を楽しむ場合に、いったいどんな障害要件があるんだろうかというのをいろいろ調査してみたわけですが、それによりますと、お手元の表、勤労青少年を調査した結果によれば、これはマルチプルアンサーといまして、いくつでも丸をつけていいという形ですから、合計して一〇〇を当然越えておるわけですが、「お金が足りない。」というものが、七〇・九パーセントと一番多いわけです。それから「時間が無い」、更に「施設や場所がない」、こういう言ってみれば「何をするか考えつかない」というところから始まりまして、「用具がない」というところまで、一番上を除いたところが非常に多いわけです。実は勤労青少年がつまり余暇の障害要件としてこのような理由づけをしているんですけれども、私は本当はそうじゃないと思うんです。一番問題は実は勤労青少年が最もわずかしら挙げていない「余暇を楽しむ気持ちさえ起こらない」ということだと思ひます。

ところが、勤労青少年に何か障害があるかと聞くと、それはほとんど挙げずに、さきほど申しましたように二番目以下の特にお金や時間や場所と、施設というものを挙げていくというところに、実はもっと深刻な問題があるんじゃないかと思ひます。勤労青少年は、自分が余暇を楽しむ気持ちさえ起こせばいくらでも余暇を楽しむような状況が現実にあるのに、それを何かほかの理由に理由づけして余暇を楽しめないでいる。何か逃避してしまっているような状況というのがあり、ここが一番問題なんではないだろうか、こんなふうに考えた次第です。

それと多少関連いたしましたして、勤労青少年たちが非常に消極的な余暇の楽しみ方をしていっているというデータを挙げてみたわけですが、人に誘われて遊ぶタイプなのか、暇つぶしのために遊ぶタイプなのか、それからやりたいことを積極的に選んで遊ぶというタイプなのか、それともこれは私なんかこの部類だと思うんですが、遊ぶために暇をつくるというタイプなのか、これを勤労青少年にあな自身はどうかということ聞いてみたんです。そうしましたら、私としては非常に残念だったんですが、「人に誘われて遊ぶほうだ」というのが二八・二パーセント、それから「暇つぶしのために遊ぶ」これも非常に消極的なタイプだと思ひますが、これが二八・五パーセント、一番多かったのは「やりたいことを積極的に選んで遊ぶ」というところで、これは多少安心したんですが。しかし、問題だと

思うのは消極的な遊び方が結構あるんだという事です。遊びに対する動機づけというのは非常に重要じゃないかという感をますます深めているような次第でございます。

大変いそいそとお話ししたもので、どこまでおわかりいただけたかわかりませんけれども、私の考えを述べさせていただきました。

加藤 鈴木先生はたくさんのデータをお使いになりました、勤労青少年は経済的にあるいは時間的にゆとりがあるけれども、積極的に余暇を楽しもうとしないんだというようになことをお話しになりました。この最初の「栄華の峠と貧乏の谷間」という、今栄華なんてあんまり使わなくなりましたけれども、このグラフを見ますと私なんかちょうど五〇歳を過ぎまして谷間に下りつつある年齢でございますが、非常に実感を持ちまして、時間もお金もなくなってくるというように感じでございます。

では二番目に、大阪府立中央勤労青少年ホームの館長の西山さん、お願い致します。

西山（講師） 勤労青少年が考えていることは何かというのは、雲をつかむような話で、二箇月間考えてきたのですが、接近の方法を考えなければ、いい結果が出ないと思われたので、多少方法を工夫しました。

ホームへ来ている諸君は、今夜の夕飯のことからカーター大統領のこと、OPECのこと、デパートのきれいな店員さんのこと、あるいは喫茶店のボーイのこと等まで、多種多様、生まれては消え、消えては生まれる考えをもって集まる人達ですが、こういう諸君と三年半付き合って参ったわけですから。そういうことで、考えていることの内容、特徴を、確実なところで捕まえるにはどうしたらいいかということで、二つほど工夫しました。

一つは、ホーム生活の事件、行事、こういうものをブリズムみたいに使って、それで考えているものを反射させ、整理してみる。喜びを分かち合ったり、議論をしたりというようなこと、緊張関係とか、リラックス状態、こういうようなものに投影される考え方。第二に補足的にKJ法。注(一)これは、未知の世界を探索し、その結果を整理するんです。考え方を捕まえるというの、一種の探索です。KJ法は「考えている」ことの探索の整理には手ごろです。ほかにデルファイ法なんて考えましたら、時間が足りなかった。それで、KJ法を併用したということです。

KJ法の結果の中から、御関心のあるようなところを申し上げます。三テーマについて簡単にお伝えしておきます。大阪府立ホーム関係のKJ法経験の諸君を、四人助手に使いまし

てやったものでございます。個票は三二〇枚ぐらい、指導員の作成したものを使いました。いろいろなことがたくさん出て参ります。第一のテーマ「生活目標として何を考えるか」ということについて見てみます。

個票を類似グループに集めて特徴づけをした第一次集約で見ますと、生活の形を変えたい、創造と確実性のある人生を求めたい等、これらを集約してみると「脱現状の意識」の方向が見られます。生きがいを持ちたい、冒險や刺激のある仕事をしたい等、これをまとめると「行動こそわが命」という方向が見られます。温かい世界、温かい社会願望、まごころや思いやりを大切にしたい、うるおいとやすらぎのある生活を得たい等まとめますと、「温かい社会」志向がみられます。

結婚とか、家庭とかが第一の目標なんだ、安全で平和である諸関係が望ましい等、「平和な家庭主義」志向、これがでています。それから 高次元の喜びを得たい、あるいは、時代のバスに乗り遅れたくないというように「友達を見比べながらの前進の希望」意識がみられます。

同時にもう一つ、「先立つものがまず必要」というような現実的な考え方方も付きます。

こうしてパターンを見ますと、若い世代に

対していろいろな言われていますが、我々だつて、若い時代は、似たようなものの考え方をしてきたのではないかなというような評価をせざるを得ません。

第二番目のKJ法のテーマは「青春時代の在り方を考える」というものです。

集約したものだけ申し上げます。

自己の確立を求めるとか、自分は何のために役立っているとか、自己を見詰めたいとかいう内省的、自問的傾向がございます。

それから「輝かせたい我が青春」と言えるもので、何か青春の記念の仕事を求めたり、ひたむきに何かに向かって活動する願望、また「青春は短く、価一刻千金なんだ」あるいは「温かいムードの中で、押し付けは御免、手作りの青春を」というような願望を持っていることです。

そしてもう一つ、「エゴ」の発現が明りょうです。自分の穴の中を守る、自由な生活を維持する、自分が大切、自分の利益が大事ということ、これに対応するかのように、政治無関心型が、広く見られます。

このような姿に、近ごろの若い者は、といわれることの片りんがあるようですが、批判する側の基準や、考え方の構造を見なければ、正確な批判はでてこない。このような姿も、我々の若い時代に一般的でなかったとはいえ

ない。

第三のテーマ「グループ活動について、どう考えているか」については、「人生意気に感じたい」、「温かい、行き届いたリーダーが欲しい」、「他人の後からついて行きたい」、「自分が生かされる小集団を求める」。

それから、メンバーである友達に対する理想がある。「悩みを理解してくれる友、同じ悩みのある友、魅力ある友」というものでございます。

更に、「すうっと入れて、活発に活動する」というような便利派も見られます。

KJ法の結果をみまして評価できることは、極めて常識的であり、我々館長の世代と著しく基本において相違しているとは考えられません。

先ほどマズローのお話がでしたが、年齢層からみまして、生存の意欲だとか、自由の意欲だとかの方に強い反応が見られます。

私のホームには、二〇〇〇人程度の登録者がいるわけですが、現業層の勤労者であり、病理的な傾向をもった諸君は最近まで見ていません。

それから、最初に返りまして、考え方を捕まえるため、リズムとして利用した、ホームの事件、行事でございます。これは、私のホームの最近の四大事件を御披露してお話し

ます。

第一は、就任して一週間目ぐらいいに、オーバーヤングを含め三〇名ぐらいいに囲まれました、年齢制限を緩和しろという事件。大阪府立ホームは四館しかないのに、六十万人ぐらいいの勤労青少年がいるわけです。

そのときは、二三〇〇人ないし、四〇〇〇人の登録者がおりまして、私のホームはいっぱいなんです。そういうことで、ホームの運営目的をいろいろ説いた。法律の目的、それから法律制定前に我々のホームは活動を開始している、その原点活動は何かを説いた。若い人たちの面倒を見ることは年長者の在り方だと説得した。それで内規を作るということで話をした。

これは後が大変だな、団体交渉みたいなことを繰り返さないといかんがなと思案しておりましたが、その後、同じメンバーで一回、内規を作って説明したらそれで終了しました。なぜだろうかと考えました。結局、若い人たちは、ルール尊重の精神が強い、条理は説明したら浸透する。それから、後輩を大事にするという一言、日本の心情というのが、ホームの青少年にも行き届いている。

説得によって条理が浸透する話はいろいろあります。例えば、写真展にムードの写真をはらしてくれという希望。この時、芸術性、

表現の自由ゆめんということが頭にありましたが、ホーム活動に有難くない、三〇枚もヌードをはったらどうだ、勤労青少年ホームの展覧会以外に多くのチャンスがあるなど方針を説明したらやっぱり納得してくれる。

それから募金活動、これは皆さん共に御苦勞のあったことですが、一回だけの説明ではほとんどしらせる。三回ぐらい段階的に説明すると、第一回に、あらかじめ、こんな企画があるということを伝える、第二回目に、ペンケチはこんなものだ、第三回目に、どうだというと、理解して協力が円滑でありました。負担のかからない奉仕というものをやってみたいと思っていたのだということが引き出せる。短期間に二〇〇枚程度が消化できました。

こうして、条理の説得に非常にも素直に対応することがわかってきました。

それから第二の事件、運動会の終了後に、胴上げをされて、けがをした事件がありました。これは、運動会の中ではないものですが、館長は少し冷たかったんですが、当事者同志の関係、胴上げをして落っこしたんですから、加害者と被害者の関係で対応せざるを得なかった。一〇人ぐらい掛かったんですが、この人たちが自発的に名乗り出て責任を分担した。二人ぐらいが逃げたですね。赤

穂浪士の率よりはるかにいい。それで、彼等にとっては多額な弁償をしました。

その後、二箇月半ほど入院しましたが、友達が二四、五人集って、寝泊りの看病、カンパ活動等順番を作って、これには指導員も参加したのでございますが、うまい具合に看病してくれました。こういう自発的、自制的な仲間関係の規範意識と申しますか、任意意識それから、同じ境遇の者に対する思いやり、こういうものが、教えられなくても、ついてまわっているというような、そういう考え方が内在しているとみられます。

第三の事件は、クラブ代表者会議の解散と企画実行委員会の創設です。代表者会議は、ずっと以前からあつたのですが、非常に低調であつた。その原因は、横断的に小グループを集めることが困難になつたことで、折感があつたり、リーダーが、ホームに対する交渉団体的な方にウエイトをおいたりしたこともあって、皆がついて行けなくなつた。

そこで多少工夫しまして、インターグループの行事の企画実行委員会ということで再出発したところ、メンバーには使命感が、小グループには、年間二・三回の協力義務感が出てきて、盛大な行事の中心になってくれました。

各小グループからの参加に対して、ホーム

との一体感をもってやれることで、税得の力もこもり、ホーム意識のような芽生えも見られました。

世話役には、自己顕示欲もありまして、これにも関心を持ちました。

この動きを見ていますと、何かを実行したい意思がある一方、小さい社会を維持しなければならぬような気持、それと同時にまた全体をまとめていく使命感、ちょうど、ホン実験工場の結果を見るような一面もありますが、我々の若い時代にみられたコミュニケーション活動の小規模なものが生まれているような思いも持っております。

第四の事件は、社会福祉施設訪問がございす。これは、総理府の統計によりまして、欧米人は、休みのときに社会活動に参加するという解答が非常に高い、日本は二パーセント強とでていました。英国は、六〇パーセントぐらい、米国では、約四六パーセントが参加している。非常に差がある。日欧米の考え方の相違ここに極まれりというように思います。

ところで、私のホームで、社会福祉訪問キヤラパンを毎年やってきました。日ごろの趣味の発表の場、それからホームのPRになる。そこで、ホーム行事として「苦役でてくれ」と苦役という古い言葉で、督励致しました。

やっつけてしまいますと、もう一度来年も連れて行ってくれという、また、そういうグループが一度ならず、二度三度と引き続いて参加している。これを見ると、欧米の宗教的基盤と比べて、日本にはそんなサービス基盤が薄いため、行動方法が分っていない、外に向って開鎖しているとして、グループ活動を評価してしまっている。何か交流の手段、方法というのを考えてあげたら活発に動く。我々の若いとき以上に、この方面の潜在的な芽はあり、進んでいると思います。

一般に複雑多様な分業社会の中で、なんか戸惑いがある、活動が制約されている。こういうことが、社会施設訪問を通じてわかったということです。

彼らには、健全な面が多い。考えていないからといって低い評価を与えてはいけない。考えていないということを考えてみる必要があります。

非常に、いろいろなことを試みましたが、まともが難しいのですが、事件を通してみても、KJ法の経過をみても、案理の説明を通してみても、病理的なものもとより、突飛さもなく、昭和一けた以前の青春よりも進歩している面さえ見られる。働いている若い人たちは概してすなおである。義務感とか、相互連帯的な意識も引き出せるし、それらに対

する自覚性もあります。

それから、小グループ活動に非常に執着をもっています。お互いの認め合いができる面を見逃せません。自己顕示の欲求の一つの現れでもあるとみて検討してみることも考えています。

それから、自分を満足させることを高く評価する傾向、ヒービーならヒービーでいいではないか、自分たちはいやだが、彼らは、他から押しつけられていない、特定の政治活動で大声を出して車をとばしても、自分の満足が得られているから、押しつけに従うよりも良いではないか、ただし、自分たちはいやだ、という哲学、ここらが新味があるといえたいえます。

全体的に、私の接している諸君は、服装も地味であり、まじめであるようです。私の在任三年半にけんからしいものが一度もない。口論しかかったことが二、三回あったのですが、「おい、ここはけんかするところではないぞ」と、手短かに言っただけでやめる。付け加えて「その解決は、館長室で二人でやれ」というとすなおにやってくれる。健康な考えの人たちですね。

加藤 西山さん、おまともください。

西山(講師) まあ、それで、マクロ的考察の下で評価すれば、我々と違っている人たちではない

のであって、違っているのは、青春時代を新聞時代に過ごしてきたか、ラジオ時代に過ごしてきたか、今のTV時代、映像文化の時代に過してきたか、そうした時代時代の相違、環境の相違による考え方の特徴の相違だろうと考えます。

それから、例えて言えば、現代という大きな建物の中の一箇所に押し込められて、周囲が不案内で冒険精神がい縮しているだけの話で、考え方の基礎にあるものは、我々年輩者とさほど異なるとは考えられない。そういう環境の中では、私たちが同じ考え方を持つのではないかと思います。

時代と場所、経験と環境の差で、肥大したり収縮したりするが、もともと持っている要素は同じであり、至って健全な常識的考え方をしているともっています。

加藤 西山さんは三年半の勤労青少年ホームの館長の御経験を通じて、勤労青少年の意識のことをお話しになりました。

では三番目は、千葉県船橋商工会議所の倉部さんからお願ひ致します。どうぞ。

倉部(講師) 船橋商工会議所の倉部佐和子でございます。私は今日のテーマを千葉婦人少年室を通じて聞きました。その時に一人の青年が私の目の前に浮んで来たんです。その青年は宮崎昇さんと申しまして、現在二七

歳、屋根の瓦敷をしてゐる青年です。

彼との出会いというのは、私どもの船橋商工会議所で主催しておりますダンス教室、話し方教室を通じてであります。船橋の商工会議所はダンス教室、話し方教室のほかにはギター教室、版画教室、将棋教室などを致しまして、勤労青少年を中心に周辺の方々にもお集りをいただいて、その中には本日会場にいらっしゃいます市川労政事務所の大矢所長さんもいらっしゃってくださっているんですが、カルチュアリー教室のようなにぎわいを呈しているところでございます。

彼は時おりここにまいりまして、みんなから「宮ちゃん」と呼ばれて親しまれている青年です。彼がある時、話し方コンタールの席で自由題というテーマで自分の体験を話しました。その時のコンタールの成績は、組立てが少しばらばらしておりましてあまりよくなかったのですけれども、その話の内容が何か私の胸にひっかかりました。今日は彼の話したことを中心として私なりに考えたことを含めてお話ししてみたいと考えています。

彼は一七歳の時に恋をしたというんです。そして一八歳の時に失恋をしてしまった。そして更に悪いことには大学の受験に失敗しちゃった。むしゃくしゃした気持ちでいたとこ

ろに、悪いことというのは重なるもので、大変頼りにしていた母親が急に亡くなってしまったと言います。彼の心の中には空洞ができてしまい、何かいても立ってもいられない、何か行動しなければならぬ、そんな状態だったわけですね。その時彼は、北海道へ旅に出ました。札幌に着いて「ああやっぱり札幌だな、札幌っていろいろのは寒いんだな」と、そう思いながらふっと足もとを見た時に、自分のくつがよごれている。駅前のくつみがきでくつをみがいてもならなかった。札幌に来たのは何か目的があるわけではない。知っている人がいるわけでもない。なんとも言えないむなしさがその時に迫ってきた。

彼ははじめての知らない土地で、寄るべのないところで自分自身というものをふっと見つめ直してみたわけです。学校にいたときにはテストがたくさんあった。そして先生からお前はよくできるから上の人間だとか、それからお前はどのくらいなら中程度だとか、これ以下だったら全然だめだとか、点数によって計られていた。自分でも上に登ろうと努力しました。あるときは大学に、自分の希望した大学にだってはいれると、そんな夢さへ持った。そしてその点数の中で安住した生活だった。あったのではないだろうか。しかし今こうやって一人になってみると、いったいそれが

なんだっただろうか。今こうやって寄るべもない知る人もないところに来たときに、自分という人間はいったい何ができるんだろうか。現実の世界とかつての点数の世界とを見比べたというんです。

そして、彼はいろいろなことを思い出ししました。学校時代大変優秀だと言われた人が、あるときキャンプに行った。飯ごう炊さんのため地べたに薪を並べて、そしてマッチをすって、ただそれだけで火がつくと思っただけで、それが「それじゃ燃えないよ」と言っても、「冗談じゃない、酸素と発火点があれば燃えるんだ」とがんばっていた。

それからもう一人。学校で大変優秀だと言われる女性がいた。その女性はみんなのあこがれの的だった。しかしその彼女がいったい何ができるかというところ、ある時マッチをすってくれと言ったら、「マッチなんか怖くてすれないわ。うちではガスは『ガチヤン』とやればついちゃいますもの、マッチなんかすれないわよ」と言っていたというんですね。

そんなことを思い出すうちに、彼自身が考えてきたんですね。知っていることと、できること。それからできると思うことと、本当にやったということとは違うんじゃないだろうか。言わば知識と知恵の違いというものが、漠然として彼の心の中で交錯したわけです。

彼はその中で自分にいったい今何が必要なのかということ、あらためて見直していたわけなんです。

それから彼は大学への興味も多少あったんでしようけれども、それを振り切って東京のある販売企業に少し勤めました。その企業の中で新入社員教育を受け、先輩からいろいろ教わって仕事を覚えました。しかし自分なりに進めて完成させた仕事を上司に見せると、上司は不安げな顔をして先輩に「この仕事見直せ」と言う。それから新入社員教育で、あいさつ、返事などは一番大事なことであると教わったとおり、「おはようございます」と大きな声であいさつすると先輩から「うるせえなあ」という顔をされることもある。また、同僚の一人の販売の女性が、店頭でおもちやを小さい子たちに売っていたのだが、新入社員教育での接遇の方法にのっとってやっていった。ところがある日小さなお嬢ちゃんが泣き出してしまい、そしてお母さんのところに走り寄って行った。そして何と言うかと思ったり「あのお姉ちゃんおかしいよ」。その女性からいったいこれはどうしたわけだろうかとか相談され、彼自身もいろいろと反省してみただけです。一応形はできているんじゃないか、だけどそれを実際の場面にぶつけると、なぜこりという食い違いがあるんだろうか。

彼自身も現実の社会に出たときのぎこちなさというものを味わっていたわけです。

そこで、あるとき先輩にそういうことを言ってみたところ、その先輩が実にいいサジェスチョンを与えてくれたそうです。「お子様ランチを知っているかい」と言うんで、「お子様ランチ? 知っているよ。ハンバーグがあつてライスもついていて、そしてサラダだってある。ジュースだってある。時には旗なんか立っているじゃないか」。そうしたらその先輩が「そうだよ。そのお子様ランチなんだよ。お前の知っているのは形は全部整っているかもしれない。だけどそのハンバーグにしろそのサラダにしろ、一つとして食い足りるものがあるか。とれて満足だっているものがあるか」。まあ考えてみると、ある程度のことにはわかった、知ったつもりでも、それが現実の中でどうかということを考えて、そこには自分自身の食い足りなさがあるのではないだろう。新入社員教育で教わった場面と、現実に直面する場面とは当然違いがあり、それへの対応ということを本当に考えているんだろいか。そんなことを彼は感じたわけだ。そういうところから彼は、もうちょっと内容がなければ食い足りない、対応力をつくらなければいけない、それには何をしたらいいんだろいかと、自分なりに考えまして、図書

館へ行ったり、友達と語り合ったり、それから勤労青少年ホームにも行ったそうです。いろいろ施設を歩いてみると親切な施設というのはいくさんあると言うんですね。ところが彼としてはなんとなくもの足りないというんです。どうしてかと聞きますと、「食堂に行つて次から次に料理が運ばれて来るような、そんな感じだ」と言うんです。ところで、船橋商工会議所のダンス教室だとか、話し方教室に彼はせっせと通っているんですけども、そこで私は私なりに多少自分のほうに味方して考えたんですが、会議所というところはもととそういう教室などは専門の仕事ではありません。夜こんなことをやっているのは、商工会議所では案外珍しいんじゃないかと思うんです。しかも女性である私が大方一人でやっているんですから大変行き届かない面があります。荒削りなんです。それでも彼がやって来るというところは、倉部さんの手が足りないからぼくが助けてやらなくちゃあとか、何かそのへんのところは彼にはむしろ魅力があったのではないだろうか。そんなふうに私なりに考えています。

ところで、ある時彼が陽に焼けた顔でやって来ました。「どうしたの」って聞きましたら「倉部さん、ぼくね大阪まで一人で歩いてみたんだよ」と言うのです。「新幹線で行く

のは簡単だけど、ぼくはなんとなく一人で歩いてみたかった。歩いてみるととても面白かった。いろいろな人に出会った。それから暑いと思っていたけれども朝なんて寒いくらいなんです。そして自分でも気付かない体調だとか、そのほかいろいろな面を発見した」。

そしてそれ以上に彼が良かったなあと考えたのは「自分の足でどこまででも歩けるんですね。歩くことに自分の価値を見出したよいな、そんなことを彼は淡々と語るんです。それからいろいろな事情がありまして、彼は会社を辞めて、現在の瓦職になりました」。

彼の家はもとと瓦職の家でおいさんもお父さんもやっていた。瓦職というのは夏の暑いときも冬の寒いときにもとてきびしい仕事です。また、同じ青年の仲間からみれば決してカッコウのいい職業でもない。しかし、彼は瓦職の中で自分を試してみたいんだと言うのです。今、彼は、宮崎瓦店と称して小さな車を持ち、一人で現場をとびまわっています。

彼の言いますには、「ぼくが今一番の理想にしているのは、かもめのジョナサンだ」と言うのです。「かもめのジョナサンは、自分の力の限りに羽を広げてそして大空高くどこまでも登って行ける。自分の力でどこまで高く登って行けるか、それを試していく。ぼく

だって同じなんです。自分の力を試してみたい。もしかすると落ちこつちゃうかもしれない。それだっていいと思うんです。多少痛くたってちょっとぐらいいけがしたって、ぼくやり直すことできるんじゃないかと思う」。こういう自信が今までの彼の体験の中から培われてきたのではないだろうか。そんなふうに感じるわけです。

以上が彼が話し方コンクールで話したと私との普段のつき合いの中での話です。そしてこの宮崎昇君という一人の青年を通して私は皆さまに一つの問題を提起してみたいなと、そんなふうに感じたわけです。

この中から皆さま方もいろいろお感じになられたことと思いますけれども、彼は時には旅に出たり、またいろいろなことにぶつかることを試行錯誤しながら、なんらかの形で行動している。そして、一つの問題が起ったときそれをはずみとして考えて、何か自分の心の中にある欲求を一つのエネルギーとして行動しているのではないだろうか。そんなことが第一点として考えられます。

そして第二点と致しましては、彼がすっかり受け身の姿勢から脱皮しているのではない。自分に可能なもの、それをステップにして将来どういうふうに自分に枠をつけていくか、それを考えているのではないか。そうい

うことが考えられます。

それから第三点としては、彼が自分なりに販売を始めていくことにより社会性への道を見開いていく面ができたのではないかということです。私は時折感じるんですけれども、今日の記念講演のモラトリウム人間というお話を伺いながらも感じたのですが、育ちのいい人、割合いに恵まれて育った人というのは、二〇代、三〇代になってもちょっと幼なさがあるようです。しかし、彼は二七歳にして一つの社会性というものを見開いている。そして現在私どもの教室に通ってリーダーとして活躍をしている。そういう姿を見ながら私はこれから宮崎君という青年がどんな大人に、どんな社会人になり、そして発展していくんだらうか、そんなことを一つの楽しみなこととしてながめているというわけです。以上です。

加藤 倉部さんは、御自分の勤務先の商工会議所でやっている教室に来た一人の青年を手掛りにして、今の働く青年は何を考えているかお話しになりました。自動販売機にお金を入れればすぐ品物が出て来るというように、あんまり整えられた環境では満足できないんだ、したがって倉部さんのように若干意識的に手引きをなさったほうが青年が喜ぶなんて大変私も興味を持ってお伺い致しました。

では四番目は横浜ボランティア協会の主事をしていらっしゃる平野さん、お願い致します。平野さんは、勤労青少年指導者大学講座、雇用促進事業団がやっています大学講座の第一期の修了生でございます。現在、講座を受けている諸君がこの会場のどこかで聞いていらっしゃると思います。平野さん、がんばってください。

平野（講師） はじめまして。横浜ボランティア協会主事の平野でございます。

今、加藤先生から御紹介いただきましたように、私は勤労青少年指導者大学講座というところを一期生として出まして、その後今の横浜ボランティア協会というところにはいました。これは、社団法人で横浜市の外郭団体に指定されております。五年前に設立された団体でございます。ボランティア活動を通じて地域の青少年を育成していく、又は若い人たちがボランティア活動をするることによって少しでも社会参加が促せるような形にしようということを目的としています。設立から二年目に私はそこにはいりました。約三年間勤めたばかりでこういうむずかしいテーマを与えられるのは分不相応ではないかなというふうに考えておりますが、その三年間に青年たちとつき合っていて感じたことを今日はお話ししていきたい。また、今私が考えて

いる課題というものを皆さんと一緒に考えることができたらと感じております。

私はごらんのとおり講師陣の中では大変若く、一九五二年生れで二七歳を迎えるところでございます。私自身、毎週水曜日の夜には横浜の勤労青少年センターへバスケットの練習に行き、月曜日には東京で私がマネージャーをやっているジャズバンドの運営というふうに活動をしているわけですが、今日はそんな面よりもむしろボランティア協会の仕事のうえで若い人たちと一緒に考えたことなどを皆さんにお話ししたいと思っております。

先日、横浜市勤労青少年センターのある会合にボランティア協会の職員として出席しました。このセンターには、勤労青少年指導者大学講座一期生のときに実習生として四箇月間いたことがあります。それから三、四年経ったわけですが、その会合に出てふと思ったことは、三年前、四年前とリーダーの顔ぶれが全然変わっていないということです。若い人たちの間からリーダー層というのが全然育っていないんじゃないのかなというような感じが致しました。ふだん私はボランティア活動に従事している若い人たちと一緒に活動をしています。最近、そのボランティア活動が非常に大きく叫ばれ、いわゆる青年の社会参加ということがあると思っています。

この青年の社会参加という問題を考えてみますと、今言っている青年の社会参加というのはボランティア活動を中心に考えられているようです。私が接しているボランティアの若い人たちを見ていると、ボランティア活動はよくやってくれます。例えば何々子供会にボランティアが必要だから、何々君行ってくれよと言えば積極的によく行ってくれる。ところが、その子供会の中心のリーダーをやってみたらどうか、というふうに例えば一年間ぐらい活動を続けたときに、私のほうでアドバイスをします。そうすると「いや、ちょっと平野さん、それちょっと待ってよ」というふうな形になります。そして、言いわけがましく、「ぼくは実はちょっとあのサークルにもはいつているし、こっこのサークルにもはいつているし、どうもそこまではその子供会のリーダーはちょっとむずかしいな」ということをよく聞きます。

社会参加と言いますと、ただお手伝いのボランティア活動だけをいう場合もあります。それからもう一つは、グループの中のリーダーとして、いわゆるアウトリーダーではなくてインリーダーとしてその小集団を引っ張っていく力になっていく。又はその自分の問題として、たとえば障害者の団体があれば少しでもそういう障害者の問題をみんなで解決し

ていとうではないかという形で、先頭を切つてリーダーになっていくという、そういうボランティアを私たちは期待をしたいわけなんです。今のそういう社会参加という形の中で奨励されている社会参加の中では、単に小さな親切運動しかできないようです。そして青年自身もそれ以上は望まないというところに大きな問題点があるんじゃないかと思ひます。

それから、勤労青少年ホームでは趣味活動が盛んに行われています。例えばお花ですとか、お料理教室とか着付け教室、横浜の場合にはお料理教室は定員の二倍、三倍の応募があるということで、非常に盛況なわけです。ところが、何か社会に働きかけようとすることに關して私たちが呼びかけをすると、ふっとこう手をひっこめてしまう。いや、私はやっぱり着付け教室に行つたほうがいいとか、いや自分たちはギターを習っていればそれでいいんだというような形で、どうも自分たちが社会に何かトライしていくというような、主体的に何か社会にかかわっていきこう、というものが、私と同世代の中では非常に欠けるんじゃないかというのを、いつも考えています。

ところで、ボランティア活動というのは一つの生き方であるというふうに言われています。

す。ボランティア活動は日常の生活からかけ離れたものではなくて、自分たちの生活の中にある一つの活動で、人間らしい営みであるというふうに私たちは捕らえています。そのような觀念からボランティアの人たちとこれからの生き方についてよく話をします。そのときよく感じることは、レジメに書ききれませんが、情報量の過多により様々な欲求が生じているということです。一人の青年がいろいろなサークルに所属し、いろいろな分野に關係しています。余暇という分野においても欲求というものが非常に増大しています。また、職業も昔に比べて、今はいろいろな分野の幅広い職種があります。また、様々な生き方があります。そんな中で、青年たちにとっては、自分がどう生きたいのかというのがわかりにくい時代になっているのではないでしようか。

さきほどの小此木先生のお話にもありましたが、自分のアイデンティティを確立するためには、モデルにしたいのかということ、が、わからなくなってきたように思っています。

余談になりますが、先日協会に關係している高校生を四〇人ぐらゐ集めました。年配のほうがよくご存知の映画だと思ひますが、「ビルマの堅壁」という映画をその四十人の高校生に見せました。私、一九五二年生れて戦後七

年経って生れたわけですけれども、水島上等兵が出て来て、「あれは水島じゃないか、水島、水島だ」というようなシーンが脳裡に残っています。私たち主催者側としては「ビルマの堅壁」のあの主人公のような生き方もあるんだということを知って欲しかったわけですが、ある高校生は「特に感想はない」というのです。というのは、「あの主人公みたいな、ああいう生き方がどうもよくわからない」と言うんですね。私たちはそれを聞いて、ちあっとショックを受けました。「はあー、そんなものかな」私は二七歳、高校生は一七歳ですから、ちょうど一〇歳しか違わないんです。しかし、今の時代で一〇年というのは大きなサイクルになっているのかもしれない。

さっき鈴木先生からも、昭和二八年の二〇代と四八年の二〇代とではずいぶん違うというお話がありました。私もそういう経験を持っております。若い人たちが生き方を求めるとき、モデルが少なく、自分が何かをつかもうとしても、実際にどうやってた方がいいのかということがよくわからないわけです。社会的経験が豊富のように今の若い人たちは見えすけれども、実際のところその深みがないがために、あつちも、こつちもという欲求が多過ぎて何か一つにしぼれないということが大きな特徴じゃないかと思ひます。

時間がありませんので、今後我々はどうふうにか若者に接して取り組んでいったらいいのか、また我々指導者、または育成する例としてどう考えていったらいいのかという課題についてはあとの三分間の補足説明の中で少し詳しく述べたいと思います。ありがとうございます。

加藤 それでは、将来の課題は補足の時にお願いすることにして、御発言の最後は明星電気の寮長をしていらっしゃる津末さん、お願い致します。

津末（講師） 津末でございます。私の略歴を簡単に申し上げますと、四八年まで陸上自衛隊に勤務致しておりましたが定年退職しまして、四八年の四月から名前はこのことさらに宛すわけではございませんが、某としておきます。某大手造船所に勤務を致しました。約五年半、収容能力五〇〇人の寮を管理させていたいただいておりましたが、例の石油ショックによるところの構造的な不況になりましたので、そこを昨年七月に辞めて現在の明星電気に勤務しております。現在の会社に来ましてからは、約一年半という年月でございます。

本日御出席の方々の中にも、私と同様の方が多分おられるのではないかとというふうに考えております。私は学者でもなければ評論家でもございません。一介の寮の管理人にすぎ

ないわけでありまして。したがって、私が今からお話し申し上げることは、学問的体系をなすものでもなければ、またデータを基礎としたものでもございません。私が過去七年間寮という生活基盤の中で勤労青少年と起居を共にしながらその中から知り得たもの、または膚で感じたものを皆さまでに紹介申し上げて参考に供したいと思っております。

先ほど来、各先生方が非常にいい御意見を述べておられますが、私はこの「勤労青少年は何を求めているか」というテーマを与えられました時に、非常に悩んだわけでありまして。体重を約一キロ減らしております。今日、昼食に結構なお弁当が出たのでありますが、私は半分しか食べられなかったようなありさまです。

と言いますのは、これは非常にむずかしい問題で、人それぞれの生い立ちなり、性格なり、又は生活環境、この中には当然自然環境も含まれると思いますが、そういうふうなものが増加されてまいりますし、また学歴や思想的な背景によっても左右されるものが多分にあるわけでありまして。したがって、一概にこうだというふうには断定し得ない。私はその結論づけるしかないわけでありまして。

ただ、その中にありましていくつかの流れはあるかと思えます。仮に同じ土壌に育っ

た二本の苗木にしましても、水の量とか日照時間の多寡によつてはそれぞれ発育状態が異なっております。人間形成の過程におけるあらゆる要素がそこに加味されてくる。殊に先ほど来諸先生が述べておられますように、現代のように政治不信や人間不信が当たり前のような風潮の中にありましては、脱社会的な要素は非常に強くなり、虚無感しか持たない若者が増えつつあります。しかしながら、今日一日を楽しく過ごせれば明日のことなんかは考えなくてもいいんだと割り切っている彼らの胸中にも、我々が看過してはならないある種の不安が付きまわっていることも事実であります。物質万能の時代に育つて、消費を美德と考へながらも反面心に満たされないものを感じて、精神的なよりどころを求めている。余談ではございますが、最近禅とか、ヨガとか、ああいうふうなものに若い者がだいた参加をしているようであります。また、人間不信を口に唱えながらも一方においては魅力のある人間、頼りになる人間というものを求めている彼ら。一見矛盾しているようでございますが、その心の中は激しく揺れ動いており、また、それが青年期の特徴でもあるというふうに考えます。

ここであらかじめお断り申し上げておきますが、私が問題の対象としましたのは、高校

を出て表社会に就職した一八歳から二四・五歳までの男子で、工場の生産に従事している勤労青少年、すなわちホワイトカラーではなく、ブルーカラーの人たちであります。昔は青少年の多くが学業を終えたと家業を継ぐ長男を残して、あとは近くの町の工場に勤めを求めたものです。中には青雲の志を抱いて上京するという方もいたようですが、ごく限られた一部の方々であって、また徒弟奉公という、今はあまりそういう言葉聞いておりませんが、住み込んでそこで五年なり一〇年なり、年期奉公をして一人前の職人になるというような勤めに出来る方も多かったです。

ところが、戦後日本の復興が急速になりまして、産業が著しく発達してまいりますと、多くの人手を集めるに必要とし始めたわけがあります。あたかも、人狩りのように人員の募集が日本全国津々浦々にまで及び、最盛期にあっては中学校を出たばかりの少年を金の卵と呼んでもはやした時代がありました。このために、地方の人口の過疎化は急激に進み、反対に大都市の周辺や新興工業団地には多くの勤労青少年が集められて参ったのであります。

またこれに伴って各企業とも、労務対策の一環としてこれら青少年を受け入れるための

施設として寮対策を推進し、今日見ますように四階建て五階建ての近代設備を誇る寮が各所に出現したわけです。ここに収容される青少年は、北は北海道から南は沖縄にまで及び、広範な地域の出身者であります。言語も違えば気質も違ふ。食べもの一つを例にとりましても、その嗜好はさまざまです。これが縦、横、升目のように切られた一つの四角い個室に入れられて、実社会への第一歩を踏み出すわけであります。

企業によって多少は異なりますが、彼らはそれから数箇月ないし一年近くの訓練を受けることとなります。まず適性などを検査されて、それぞれに合う職種が選定される。それから必要な技術を初歩から仕込まれていくわけですが、そうした訓練期間中にも、早くも若干の脱落者が出てくるわけがあります。これは単純な心理作用と申しますか、ホームシックにかかって帰る青少年もおりますし、また、父親が亡くなったために家業を継承しなければならぬというケースもあるようであります。中には、一応東京見物は終ったからほちほち帰ろうじゃないかというちゃっかり組もおります。やがて訓練を終えて、それぞれの職場を指定されて配属されるわけですが、問題はここから起こるわけです。彼らの多くが大部会に

機はいろいろあると思うのですが、一時的に仕事についた人々を除けば、多くの青少年は自分の将来をそこに託すという依存度があるわけです。いざ仕事についてみると、自分の抱いていた夢と現実との間にあまりにも大きなギャップがあることに気付くのに、さほど時間はかからないようです。

御存知のとおり産業の近代化に伴い、機械類はすべてオートメ化され、そこで働く人間は部品化されて単純な仕事の繰り返しとなります。殊にベルトコンベアーの仕事になりますと、チャップリンの有名な映画「モダンタイムス」の中に見られる諷刺そのもので、考えることよりも能率よく動くことのほうを要求されるわけがあります。なんの変化もない単純な作業、言うならばただただ、縮めるだけ、伸ばすだけ、つまむだけというふうなカテゴリーとなるわけがあります。時間に余裕がありましたならば、後ほどその例についても申し上げようと思っておりますが、このように人間の創造性を無視した単純作業に長時間従事しておりますと、次第に勤労意欲を失って参ります。考える力をなくして無気質的な人間につくり変えられていくわけがあります。そこで働く青少年の意識に進歩向上があるわけがありません。

かろうじて彼らを支えているものは、職場

における人間関係であって、良き上司よき同僚を得ることによって人間性を回復しているわけです。しかし、それすらも得られなかった場合においては、その心は次第に荒廃していき、働く意欲はおろか前途を悲観して生きることへの努力をも放棄してしまうことがあります。

私が以前勤めておりました某大手造船所の寮で、入社三年目の青年が三階の非常階段の手すりを乗り越えて、飛びおり自殺を図ったことがございます。幸い、地面が柔らかかったため、骨盤にひびがはいった程度で命に別条はなかったのですが、その青年は日ごろから無口であり、おとなしい性格で仕事も真面目にやる責任感の強い青年でした。しかし、心を聞いて語り合える友達がいなかったようです。実家は九州の片田舎で、父親は漁師をしておられたようですが、家が貧しかったために高校を出るとすぐにその会社に就職したわけです。入社以来わずか三年で、一二〇万円の貯金をしておりました。飛び下りる寸前に書いたと思われるノートの走り書きに「この金で妹を高校に進学させてもらいたい。そして残った金はかねてからお父さんが欲しかった漁船を購入する資金に充ててくれ」と書いてありました。

友達が多くがテレビを買い、また、ステレオ

を購入して私生活をエンジョイしている中にあって、この青年の部屋には古ぼけた旧型のラジオと、紙製の将棋盤が置いてあっただけです。酒も飲まず、もちろん煙草も吸わず、遊びに出かける様子もなく、寮と工場の間を専用バスで往復するだけの毎日であったわけです。休みの日には一人部屋に閉じこもってラジオを聞き、将棋をさして退屈をまぎらわしていたものと思われまふ。

いったいその青年は何を考えていたのでしょう。家の貧しさを憂い妹の高校進学を願って、ひたすら金をためることに専念し、語り合える仲間のないままに一人部屋に閉じこもって孤独に耐えながら、多感な青春を送っていたのでしょうが、その張りつめた心の糸も三年の歳月の間にぼろぼろになって、ある日それはぶつんと切れてしまったわけでありまふ。

そのころ、その工場で働いている若い人たちの間に皆さんも御存知の「朝焼け君」の歌がはやっていました。世間一般にもこの歌は流行しておりましたので、私はさして気にはとめなかったのですが、後でわかったことなのですが、その歌の出だしのところの歌詞に、彼らは自分たちの職業の内容を織り込んでいたわけです。「毎日毎日鉄板の上で焼かれていやになっちゃうな」、あそここの箇

所であります。彼らは会社に出ると毎日暑いさ中も、その歌がはやったのはちょうど夏でしたが、冬の寒風の吹きすさぶときでも、とにかく毎日鉄板の溶接作業をやっていたわけでありまふ。

夢に大小の違いはあっても、だれにも一つの目標はあるわけですが、それが達成される見込みがあるうちは人間は意欲を燃やすのですが、それがむずかしいとなると努力するところが徒勞に思えてきます。次第に意欲を失っていく。来る日も来る日も鉄板の溶接ばかりやっていると、自分の人生が次第に無味乾燥のように思えてきて馬鹿らしくなったのだと思います。

私がただいま勤務しております会社は、別に宣伝をするわけではございませんが、規模はあまり大きくなく専門メーカーとして気象観測装置や宇宙開発装置を製作しております。ここで働いている人たちは、他の企業に見られるベルトコンベアー式の流れ作業は一切しておりません。そのほとんどが専門分野を担当するエンジニアメカニックで、そのために仕事の内容も単なる工場作業にとどまらず、ロケット実験に参加したり全国各地の気象観測装置、航空関係装置のアフターケアに出かけることも多いわけでありまふ。昨年は南極観測にも参加し、今年の春越冬を終えて帰

つて来た社員もおります。

ここの青年たちの仕事に対する考え方は、単にそれが課せられた義務であるからという消極的なものではなく、いかによくやり遂げるかという非常に積極的なものです。したがって、独身寮内における生活態度も、相互信頼と自治をベースにして健全な私生活を営んでおります。これは一つには工場の規模が小さいので、会社員が顔見知りであるということもありましょうが、それにもまして工場長の指導よろしきを得て、人の和を基調とした人間関係の調和が実によくとれているためと思われまゝ。自分はここで大事にされて、会社の役に立っている、みんなから認められているという自覚、すなわち自分を自分で動機づけるものがあるからに他なりません。

以上申し上げた二つの工場で働く青年たちのものの考え方には、相当な隔たりがあるわけですが、その原因は、片や大手企業の方は会社は自分たちを人間として扱ってくれていないという不信感から先行き不安を感じており、片や中規模の工場では、自分は会社の役に立っている、会社も自分たちを信頼しているという充実感から将来の生きがいを見出し、いるようであります。

時間がございませんので、一応これで打ち切っておきます。ありがとうございました。

加藤 津末さんは大きな造船会社と今お勤めになつてゐる中規模の電気会社とで働く青年の差についてお話しになりました。

それではだいたい時間がつまってきていますので、三分という補足の時間になっておりますが、もう少し短くてもけっこうです。なるべく時間の節約に御協力ください。鈴木先生からどうぞ。

鈴木（講師） 私、さきほど動機づけと言いますか、余暇を楽しもうという気持がないこと、つまりその意味では気持を持たせることが大事だということをお話をさせていただいたのですが、西山先生のお話では、リーダーが欲しいとか、他人の後についていきたいというようなことが青年たちの意見として出ているということですが、私が申し上げたことが多少西山先生のところでも当たっているのかなというふうに感じました。

それから平野先生が強調なさいました活動の主体者になろうとしない青年が多い、たとえばボランティア活動を人についてやる時はやるんだけれども、あなたが責任者になれと言われるとやらなくなるといふ、これも私の考えていることと割合似ている傾向をおっしゃっていただいたなという感じを持ったわけでございますが、それにつきまして実は私は役割制行動ということをちょっと申し上げ

たいんです。これは私どもの専門用語なんですけれども、自分がある役割りをやるかやらないかわからないときには不安を持っている。しかし、とにかくその役割りを与えられると、人間というのは実はものすごい能力を発揮するんだと。だから実際にやらしてみなければ人間というのはわからないんだという、社会学の用語です。会社で言えば、あの人は係長なんてとっても無理だろうと思われていた人が、お前が係長にならなければ会社は困るんだと、こう言われて係長になりますと、想像もできないような、ものすごい力を発揮するというような場面がよくあるわけでございます。そういう意味で私はさっきの平野先生のお話でも、主体的にやろうという気持のない青年でも、現実にはやらしてみようということによって、何か非常に大きな力を発揮し得るということがあるんじゃないかと思うわけです。そして、レジャーの場面における動機づけということにつきましても、そういう考え方をもう少し掘り下げていく必要があるんじゃないかと、こんなふうに考えた次第でございます。

加藤 では次に西山さんをお願いします。

西山（講師） レジメの(3)、(4)をまとめていきます。箇条書き的にしますので、よろしく。

① 現業層の若い人々。これは半人前の時代、徒弟時代の人たちです。そういうことで、モラトリウム人間ではないんです。しゃばは違っていた、学校生活とは違う、そんな戸惑い、悩みがあるんですね。そこで生活に一本筋を通そうとする。悩みを友人に聞こうかというように人々を中心に集まるところですね、私どものホームは。そんなことで健全な考え方の人が多いと思うのです。

② 昔とあんまり変らないと申し上げたのですが、問題となるのは、館長と利用者の世代の差、新聞時代、これは、農業依存時代であり、五大強国時代です。ラジオ時代、これは戦争及び戦後混乱時代です。それからTV時代、これは国際化時代、平和主義時代、高度経済発展の時代です。新聞時代は、文字の美学をもってあり、壮大な倫理を、国民に与えることで、国の発展が素直に信じられ得た時代です。その新聞時代の世代が、教育勸諭は、いいところ「も」あるという話をする。これに対し、ラジオ時代の人は「も」とは何だということになりちょっと考え直す点もある。さらにTV時代の若者は、難しい言葉で表現しなくても、もっとフィーリングのある言葉で倫理を教えてくれと、こういうことになるのではないでしょうが、社会の条理、倫理は決して否定していません。

③ 青春は希望に溢れ、可能性に満ちているという考え方、これをA型とします。B型、青春は苦悩が多く、活動分野が制限されていて迷いが多いとする考え方、どちらをとるか、女性には割とAが多いようでした。それから、男性にはB型とA B混在型とで占められました。B型の人に話を聞きますと、現在は学歴社会、資格社会なんだ、望ましい活動の分野を与えてくれない。だから親身になってくれる人、親分的な人が欲しいんだという人がおりました。親分うんぬん、若くて力のある人が、一度挫折したら、ヤクザの道があるというので考えさせられました。甘ったれとヤクザの二つの道、考え過ぎてしょうか。

④ それと、自分の感覚、自分の生活に即したものの傾斜主義、自己中心主義が強い。現代の中で感覚的自己への、のめり込みは、引き戻すのに苦労すると思います。

⑤ 講座をやります。歴史もの、哲学ものは食えない。働いているのに顧みるゆとりはない。歴史講座で「黄金の日々」の時代の大阪の歴史」というのを出したら、そんなのには五人ぐらいいしか集まらない。簿記、保母講座、音楽、デンマーク体操、ダンス、スポーツ教室、これはいい、フィーリングがあり、実用性のあるもの、こんな方向を好みます。

⑥ 館長は何がやれるのか、若い人たちの考

え方に対して果たし得るものは、彼らの自覚性や内在的力の発現において、無理が少ないよう、無駄が少ないよう、ムラが少ないよう努力すること、そこらに意味があるような気がします。いろいろ並べ立てましたが、つなぎ合せは各ホームでよろしく願いたいのです。

加藤 つなぎ合せはむずかしいと思います。それがじゃあ倉部さん。

倉部（講師） 私は宮崎昇君という一人の青年を浮彫りにしながら申し上げたんですけども、彼が何か行動する度にそれを整然と一つずつ乗り越えているように、皆さんに受け取られたんじゃないかと思うんですが、決して彼はそうではないんです。一つの行動から一つの行動に移す時には、本当に頼りなくなるときにはどう僕な姿勢もするんですけれども、やっぱり何かに頼りたいというところがあります。その何かに頼りたいというのは、彼の苦しんでいること、むなしさ、どうしたいのかわからないことを聞いてもらう人がやっぱり必要なんだということです。私たちは年齢が上で、少し社会的経験を積んでいるので、若い人たちに何か起きた時にゆっくり聞いてあげる、そういう姿勢が必要なんじゃないかと思っています。そして、私たちの話すことを一つのステップにして彼らは行動に移していく、そんなことを

考えました。以上です。

加藤 それでは平野さん、お願いします。

平野 (講師) はい。実は補足の中でいっ

ぱい説明をしたいんですが、時間がないので、ちょっとはしょって説明させていただきます。

先ほど生き方の模範ということであつとお話しをして、それで終わってしまったんですが、生き方を模範していくプロセスの中で一番重要なことは、二番目のところに書きましたけれども、自らの力で何かを創造していく行為、経験の欠如とありますが、やっぱりそういった場面を、われわれのほうで環境をつくってあげなければいけないんじゃないかということなんです。そしてもう一つ大事なことは、それに付随してやっぱり創造していく、何か社会をつくっていく中ではやはり学習という行為が大変必要だと思います。今、勤労青少年が学習に費やす時間は大変少ないんじゃないかと思います。先ほど西山館長がおっしゃいましたけれども、簿記講座のような技術的な講座は、非常によくはあります。ところが自分がどう生きたいんだという問題の講座になると、がたっと減るんです。がたっと減るということで、ずいぶんおやめになるような施設があると思いますけれども、私は決してやめてほしくないと思います。二人でも、三人でもいいです、そこに飛び付いて

きた青年がいたらお互いに学習していきながらもっと増やしていくことが大事だと思います。「女が職場を去る時」というテレビドラマを見ました。私、非常に感銘しました。あ

あいう生き方というのは勤労青少年にとつてこれから身近になる問題です。例えば女性の自立の問題とか、それからもし子供ができて二人とも共働きしたときに、子供はどうしたらいいか。保育所が足りない、そういう問題。そういう問題ももっと我々青年たちがまず考えないと、将来の日本はだれが背負っていくのかということになりますと、大変私は不安な気がします。ですから、青年たちの関心が本当はどこにあるのかを理解し、もっと心の問題というものを我々が取り出してあげて、その学習活動の場を設定してあげなければいけないんじゃないかなというふうに考えます。

ボランティア活動のことですが、我々は若いボランティアの人たちにもう少し主体性をもつてやれよとか、もっと積極的にやれよと言いますが、青年たちは言葉だけで絶対ついてきません。大事なことは、一緒に考えて、悩んで、学習して、そして一緒に動くという場面を多くつくることじゃないかなというふうに、考えています。一緒に働こうじゃないかという形の中で共感していくような関係を

つくっていくことが大事じゃないかなというふうに私は考えます。

ジョン・キールという人の本で「ユースワーカー」という本があるんですが、その表題のところに「青少年と共に意義のある人生を」というような副題が付けられています。

つまり自分自身ユースワーカーという職業ではあるけれども、青少年と一緒に生きて、青少年の人たちと一緒にいい人生を我々も送ろうじゃないかという呼びかけをもつて書かれた本なんです。私は、きざな言い方で大変恐縮ですが、青年と接するとき、一緒に何かやっていこうじゃないかという言葉をいつも胸の中に持っているつもりなんです。

まあ、あまりうまくいっていませんけれども、最後に、青年の興味、関心をいかに社会的なレベルまで伸ばしていったらいいかという問題があります。先ほど倉部さんから、ある一人の青年の生き方の中でいわゆる社会性に目覚めたときに自分は何ができるのかということ考えたということをお話ししていただきました。やはりボランティア活動なんかもそうなんです。自分は何ができるのか、社会の中で。自分はどういう役割を持っているのかということがまず出発点になるのではないかと思います。これは鈴木先生も先ほど役割り行動ということでおっしゃっていました。

けれども、そういうものを青年に課題として与えてやって、それを我々の方でフォローしてやる。例えばギターを弾ける人がいる、じゃあギターを使って何か社会と結びつくようなことはないか。そうだフォークグループをつくる、フォークグループをつくってどこか施設へ慰問してくるのもいいだろうということで、それによって本当の社会の問題というのがよくわかると思います。今、若い人たちはどうもわれわれ、ぼくみたいな若い人であっても、「おじい」とよばれる時があります。ある時中学生から「なんだ、あんなおじい」なんて言われたこともあります。世代間が非常に広がっていますけれども、その中で一番考えなければいけないことは、「老いる」ということです。人生生きるということと、それから老いるということ。老人になることです。それを今ぼくたちなんかも非常に粗末にしているんじゃないかなというふうな感じがします。老いるということ、決して汚いことでもないわけです。これはかえって美しいことだというふうに考えるわけです。やはりそういう、自分がもし老いたときにやっぱり自分たちの世界がどういうふうになっていくのか、また自分たちがどういう生き方をするのかというの、やはりわれわれ若い世代のうちから一つ一つ考えていくということが

必要なんじゃないかなというふうに考えています。

長くなりましたけれど、以上でございます。ありがとうございます。

加藤 それでは津末さん、お願いします。

津末（講師） 殊更つけ加えることもございませんが、ちょっと補足致しますと、私の人生経験からして人間のもの考え方や見方というものは、その人が置かれた生活環境なり、職業環境によって多分に左右されるものであるということです。したがって、今日与えられましたテーマの「勤労青少年は何を考えているか」ということの前に、彼らの置かれている生活環境、特に寮という集団生活の場や、職場環境の中に何があるだろうか、人間を人間として正しく扱うことの大切さなどもし欠けていたならば、彼らの考え方もまた必然的に変らざるをえないと思うわけであります。

その意味で構造社会の欠陥というものが勤労青少年の意識というものを大きく左右していると思うわけであります。彼らが何を考えているかということよりも、彼らに何を考えさせているかということのほうが責任は、我々にあるんじゃないかと思えます。以上でございます。

加藤 以上で五人の講師の先生方の御発言

は終わったわけでございますが、後半の時間を皆さま方からの御意見を伺いました。ここで休憩にはいりたいと思います。

（休憩）

(全体討議)

加藤 まだお席にお戻りにならない方がいらっしゃるようでございますが、始めさせていただきますのでよろしくでございますか。

時間が大分なくなりまして、後残りが一時間ちょっとでございます。残った時間を最大限に活用致しまして、活発な質疑応答、あるいは御意見の発表に当てたいと思います。

左腕に白い腕章を巻いた指導者大学講座の学生諸君がマイクを持っておりますので、お席にもマイクが運べますし、ちょうど中段のところにも二つばかりマイクがございます。御発言になる方は御都合のよろしいところで御発言願います。御発言になる前に、所属とお名前をおっしゃっていただきたいと思ひます。

それから、講師先生への御質問の場合には御指名になったりえで御発言くだされば結構だと思ひます。それでは質疑応答に移ります。どなたさまからでも結構でございます。お手をお挙げになってください。最初の発言は勇気がある人だと思ひますが、勇気のある方いらっしゃいませんか。はい、どうぞ。やっぱり女性の方が勇気がある。

中村 (京都府・亀岡市福祉事務所職員)

私は子供を持ちながら今まで働いてきたわけなんですけれども、自分たちが就職したそ

のときと今の若い人たちとの間に、すごくギャップがあるように感じるんです。というのは、今の若い人たちは自分に利益になるかならないかというのをすぐに考え、もし自分とかかわり合いがあることならばやるし、そうでなければだれかがやってくれるのを待ってついていくというような形で、自分が先頭を切ってやるうとはしない、そういうところにすごく矛盾を感じます。また、朝のあいさつなんかは「お早ようございます」と私たちから声を掛けたいと思ひますが、それで午前、午後にわたっていろいろな話を聞かせていただいたのですけれども、お話の中に出てくる勤労青少年についてはいろいろと与えられた場所があって幸せだと思ひます。それ以外の青少年についてはどういうふうに考えていくのかということが、大変大事なことで思ひます。私のところは小さい市です。勤労青少年のセンターとかホームとかがないのですが、少しずつボランティア活動的なものやサークル的なものが指導されつつあります。しかし、そこに出ない青少年が何を考へているのかをこれから追求し、また、そういういった青少年をどういうふうに誘いかけていくのかといったところが、大変重要であろうと日々の仕事を通じて考へているところで

す。

加藤 今のは御意見発表で、別に質問ではないわけですね。

中村 はい。

加藤 はい、どうぞ。

小幡 (秋田市勤労青少年ホーム館長)

感想のようになってしまいましたが、御了承願ひたいと思ひます。まず最初に鈴木先生は統計、アンケートから青年の現状はこうだと、したがって、もっと深めて参りたいと。また西山先生はホームの館長の経験を通ひまして現代の青年の意識は私どもの青春とほとんど変っていないと。まあ最後にはこういうような状況だから各ホームの館長よろしくたのむという声があったわけでございますが、三番目の倉部先生は商工会議所での青少年教室を通ひまして知り得た青年の期待の問題。それから四番目は平野先生から、平野先生は大部分映画は好きなように非常に結構なことだと思ひます。そこでリーダーのまあなんとかが変りばえがしない、あるいはリーダーが育っておらないのではないかとというような問題から、映画に対しても感想が非常に拒否反応を示しておると。また最後に津末先生は、青年についての考へ方、あるいは職場環境によって変ってくる。まあ五人の先生の貴重を御発表によって現在の青少年の考へ方について

それぞれのお立場からのお話が大変勉強になったわけですが、私も考えるにシンポジウムだからやむを得ないと思いますが、私の見た青年像はこうだから自分としては現在のこの問題点に対してこうやっていきたい、こういうようなある程度の解決策がもう少しあってもよかったらうと、こう感じた次第でございます。どうも大変ありがとうございます。

加藤 おほめの言葉を伺ったわけですが、ありがとうございます。どなたか後かに、はい、どうぞ後の方。

薄田 (秋田県・男鹿市勤労青少年

ホーム館長)

鈴木先生から御指導願いたいと思います。先生のレジメに載っております調査の結果について、先生は専門家の見地から問題であるというふうに御処理になっているようでございますが、我々が青少年に対してアンケートをとった場合でも、本当かなあというふうなことがたまにあります。というのは、先生が設定されました設問内容と大体同じようなことをとっても、例えばお金がないから余暇活動ができないとか、あるいは時間がいないからというふうなことを答えているが、個人的に接するとそうではなさそうなのがあります。当然のことながら調査は結果については

補正はできないはずなんですけれども、何かそこに今日のテーマである青年は何を考えているのかというふうなところにひっかかりを持つものでございます。この分析の方法において先生は時間がなかったたのでその辺のことに触れなかったのかもわかりませんが、もし何か補正してくださることがありでしたら御指導願いたいと思います。以上です。

鈴木 (講師) 大変重要な御指摘だと思います。確かにこの調査自体はいわゆるアンケート調査と言いついて、面接でやったわけではなくて調査票を配布してそれに自分で記入してもらう、自記式という形でやりましたので、割合そういう場合には本音を答える傾向が強いんです。どうも面接でやりますと相手の顔色を見てたでまあで答える、こういうことを答えるのと恥ずかしいとか、そういう気持ちが立つものですから割合今おっしゃったようなことが起こるんですけれども、この場合アンケートなので、まあ一応は考えているところはある程度答えているんではないかとは思いますが、しかし、おっしゃられるとおりで、こういう調査というのはやはり表面的なことしかわかりません。実際心の中で何を考えているかというところまで知るには、かなり克明に一人一人あるいは面接調査も併用しながら深層心理を探るといような調査をしてい

かないと、実際のところはわからないと思います。これはさきほど申し上げたことで、ある意味では重複することになるんですけども、私は実はこの調査のデーターをそのまま解釈したくはないんです。つまり、お金とか時間とか、施設がないから勤労青少年は余暇を楽しめないでいるんだというふうには解釈したくない。NHKの調査で、時間と余暇の関係、余暇時間の多少と余暇の充足率というものを調査したデータがございます。ちょっと考えると余暇時間が多い人ほど余暇に対する充足感が高いんじゃないかというふうに思うんですけども、これで見ますと結果は全く逆でございまして、余暇時間が短い人ほど逆に余暇に対する「おれは余暇で十分楽しんだ。おれはやったぜ」という気持ちが高い。時間が足りないから余暇が楽しめないと勤労青少年は答えるけれども、時間がなくとも十分楽しんでいる人がたくさんいる。現実の問題として皆さん方の各地域においては、先ほど御発言がございましたようにホームも何もないという地域もあるいはあるかとも思いますが、あるいは施設がなくとも、時間がなくとも、あるいは施設がなくとも、なんとか努力すれば安いお金で、あるいは短い時間で余暇を楽しめるというふうな施設があると思うんです。あるいはそういう機会があると思うん

です。

ところが勤労青少年は、むしろ一番大事な自分自身が積極的に余暇を楽しもうという気力に欠けているというような気が、私はしているのです。今の御質問の答えになっているかどうか分かりませんが、私は実はこのデータのパーセンテージの多いほうから順番に問題があるんですよと申し上げたわけではなくて、むしろ逆に一番少ない六・六パーセントしかない「余暇を楽しむ気持さえ起こらない」というこれが非常に少ないところにこそ勤労青少年の抱えている一番の問題点があるのではないかと、こんなふうにこのデータを読みたかったわけでございます。どうも失礼致しました。

加藤 はい、どうぞ。

中島 (島根県・益田市勤労青少年

ホーム館長)

昨年もここで質問したんですけども、今日は五人の先生方のそれぞれの立場からのお教えを受けまして、感銘深いものがあったと思います。

ところで、私はホームを運営してみまして、最近非常にホーム離れが進んでいるという感じを強く持っております。それからホームを通じて出会いのある子供については指導できるがそれ以外の子供は指導できない。ホームに出会いのある子供というのはいったい何バ

ーセントいるかと言いますと、私自身も恥ずかしいことですけれども、二〇パーセントでございます。八〇パーセントの者はホームを利用しない。だから我々の指導の立場から彼らが何を考えているかというようなことも、非常に解決が難しい。そこで西山先生に伺いたいことは、あなたのところは大体何パーセントがホームに来ておるかということと、全然利用しない者がかなり多いということについての御意見を伺いたいと思います。

西山 (講師)

私のところは今だいたい

一〇〇〇人前後の登録がございます。一番多い時には三〇〇〇人あったそうでございます。これは大阪の都心にありまして、第三次産業に従事する人たちが中心になっていきます。減っている理由としてホーム離れというのも確かにございます。しかし、一番大きな原因は三〇〇〇人時代というのは大阪市立のホームと私のホームの二つぐらいしかなく数が少なかったことです。

大阪府下には、六〇万人の対象者がおります。これは大げさに言えはそうですが、遠方のところもありますので、身近にはそうたくさんはいないんですが、それにしても私のところに来られる範囲内で見れば、おそらくこれは一〇万人やそこらにはいるはずですよ。一〇〇〇人しか来ていないということも問題

でございますので、魅力あるホームづくりをいかにするべきかということを、私は就任早々検討致しまして、朝四〇〇〇枚ほど地下鉄の入口でビラまきをやりました。一週間ぐらいかけて。ところがこれ手ごたえがあんまりない。二パーセント程度の手ごたえしかございませんでした。

施設が陳腐化しておる、自動車時代である、旅行時代である、拠点としての魅力がかなりさびれてきているということがございますね。それからスポーツ施設がなかったと、こういうことが施設としての問題になってきている。それから第二番目、会合又はグループ活動をするというような部屋の間とりになってきている。それで小集団化しているというようにあることがありまして、なんとかなりまい手はないかと思いつながら、あれやこれやの思案をしております。坂田三吉と一緒にでございます。今日は大阪から出てまいりましたので、あの手の手の思案にくれてこちらに来て、いい知恵でも教えていただきたいと思ったんですが、講座についても、三〇人ぐらいで止まってしまつて、教室の数が限られますので数を増やすことができない。それから好みの問題。まあ自動車の社会、旅行の社会で、これはつい外へ行ってしまう。それからほかのグループ活動というのが、かなり充実してきていると

いうこともあるわけなんです。自覚を促すとかあるいは健全な勤労青少年として育成するとか、明日の勤労生活に希望を与えるというような活動の目的と、そうした自由な生き方をする人たちとの認識の食い違いが出てきているために、ホーム利用者の目減りが出てきているのではないかと、まあ原因分析だけではないんです。努力もしております。しておりますが、まだ力及ばず非常に沈痛な思いと言えは大きいです。そういうところですのであしからず。特に第一次産業地帯や公民館と並んでいるようなところはまた私ども以上に難かしい魅力の問題があるかと思ひますが、私の答えはそういうところには及び得ないだろうと思ひます。

中島 同じような傾向で意を強うしました。今後一つよろしく願ひます。

加藤 はい、どうぞ。

鈴木（宮城県・鹿島台町勤労青少年

ホーム館長）

西山先生にお教えをいただきたいと思ひます。なお、ほかの先生方もこのことについて何かアドバイスがございましたら、よろしくお願ひしたいと思います。

私は、青少年も地域の形成者の一員である。とこんなふうに描かれているものでござい

西山（講師） 何の形成者ですか。

鈴木 地域です。地域。日常生活の範囲で毎日行動している。その中においてすべての人たちは自己というものを確立していることだろう、このように思ひます。ホームでの学習とか、そういうものは一つの方便であるだろうと。その地域づくりに根を下ろしてこそ、はじめて人間というものはお年寄りに対して親切にするとか、あるいは相互扶助とかができ、連帯感とか信頼感とかが生まれます。そして社会の浄化などもその中に含まれるだろうと、このように思ひます。で、青少年はすべて日常生活をしている範囲の地域の一員であるので、それに根を下ろしたところの学習活動なり、すべてのものが行われなければならぬと、私はこのように思ひますけれどもいかがでしょうか。

西山（講師） 地域の問題でございしますが、私どものところは、おおよっぱに考えて地方出身者が五五パーセント、地元大阪が四五パーセントです。ちなみに、女性が大〇パーセント、男性が四〇パーセント。大学卒が五〇パーセント、それ以外が五〇パーセント。それから大企業と中小企業半々くらいのところなのでございます。

地域性と申しますが、これはまず府県の施設では公益性を持っている点で、市のホーム

とは地域性というのが物理的に少し違ってくる。それから大阪というところは東京、名古屋あたりといっしょで外部から来た人が多いということでございます。地域の概念として、特に第一次産業地帯とは大いに違うと見なければなりません。それで、地域が違うということで機能が違ってくる。どこが違うかというと、非常にうちひしがれてくる。例えば、私は九州弁ですが大阪の言葉は二〇年たっても話せない。勤労青少年が張り切って仕事をやろうと電話を取った。つい鹿児島弁が出た、熊本弁が出た、そして笑われた、そのためにがくつときて死んでしまったという例が二〇年前にあったそうです。これは滅多活動です。それから最近は何暇活動の問題、余暇をどうやって善用させるか、テクニクの問題がございします。そういう点で我々が置かれている都市の活動形態と、第一次産業地帯というようなところとは、かなりパターンが違ひような理解を私はしております。近畿六六ホームにおいても、パターンが違ひているようです。ですから、きめの細かいやり方を工夫してみなければならぬ。地域性というものは面積が小さくなればなるほどはつきりしたものが出てくる。そうでないところは別な原理が出てきます。私はさように理解しております。それでは地域と一緒に活動は全く

やっとなにかというところでもありません。

例えば町内会、それから周辺の企業との取り組み、こういうのはその別の原理に基づいて、人が得やすいからというところで取り組んでおります。地域とはやはり密着しなければならぬというところが非常に重大性を持っているので、別なテクニクを考えていくべきだと、私はさように思います。

鈴木 もう一度お聞きしますが、「黄金の日々」の講座の参加者が非常に少なかったというお話ですが、残念なことだったと思います。歴史に照らして青年たちの人間像を浮彫りにするのはいいことじゃあなかったろうかなあというふうな考えも致します。その辺はいかがですか。

西山（講師） 実はこれは私のアイデアでございました。喜んでくれると思ひまして講師の先生も新聞社の加藤先生のような方をお招きしたんです。しかし、結果としては、必死の思いでさくらを募りまして、やっと一五人まで寄せ集めたんです。後で聞いてみますと、やっぱり歴史は食べ物にならないんだそうです。そういうテレビは見えていない。テレビの映像というのは、字に表現する暇がないぐらい場面が変わります。ちょうど映画を見る。あるいは音楽を聞くような心で評価するというフィードバックが必要です。だからフィ

クションとしてこれほど強烈にドラマティックにつくられている歴史物を評価しない。これはやっぱり私の頭が古びたのでしょう。私のほうから歩み寄らないといけませんね。彼らが進んでいる。

ちなみに、メソポタミアの遺跡を発掘して粘土版を一生懸命苦労して読んだら近ごろの若い者は年寄りの言うことをちっとも聞かないということが書いてあったそうです。五〇〇〇年の歴史の中で、若い者は年寄りの言うことを聞かないんですね。しかし、年寄りの好みと若い者の好みが違うから進歩もするんです。けれども、若い者のしかるべきところはしからなければいけない。しかし、しかも一〇〇パーセントそのとおりにはならないですね。しかられることを頭に入れて自分の行動を選択している。そういうことで「黄金の日々」なんていうのは、実ははやらなかったことを契機にして私深く反省しているわけなのでございます。私の方が勝手に解釈をしていたと、そのように思っております。

加藤 よろしくございますか。

鈴木 はい、ありがとうございます。

加藤 はい、前の方。

中村 たびたびで恐縮ですけども、実は私どもの方で一月三日に勤労青少年の集いというのを毎年恒例のごとくやるんですけど

も、この中で青少協の委員さんとか、行政側から出まして勤労青少年を表彰致しまして、そこで座談会を持つわけなんです。その席上で、大人に対する要求とか、行政に対する要求とか、いろいろなことを尋ねるわけなんですけれども、それに対して青少年は何も反応を示さないんです。ただ、それではこういう式典が気まずいのかと尋ねますと、いやこれで結構ですと、いったい何を考えているのかわからない。先ほど倉部先生がおっしゃりましたように、現在の青少年というのは本当に満たされ過ぎた社会の環境の中にいる。作られ過ぎた環境の中で自分が物事を考え出す場がないほどに満たされ過ぎてるんじゃないかというふうに、常々私は考えているんです。それで平野先生もおっしゃったように、ボランティア活動が少しずつ定着しつつあるけれども、それに指導者が残らない。指導的な立場の人が残ってこない。いわゆるそれに責任を持ってやりなさいということになったら、いやごめんだ、自分は何か忙しくてごめんだというふうに逃げてしまう。こういったことで、本当に今の社会がいいのかどうか、果たして今以上に青少年に我々が何かをしてあげるべきなのか、それとももう少し放っておいて、これではいけないということを自分たちから考える機会を与えるべきではないの

かと、私はこのように思うんですけども、諸先生方のお考えなり、意見をちょっとお聞かせ願えたらうれいと思うんですけども。

加藤 鈴木さん、どうですか。

鈴木（講師） 大変難しい質問だと思います。今の御質問の答えになるかどうか、ちょっと不安なんです。これは余暇活動もそれから労働でもそうなんですけれども、楽しさを作れば人間は行動するのではないかと、つまり、楽しさというものを作ることがまず原因で、結果として行動があるというふうに、我々は頭で考えやしないか。しかし実はそうではなくて、まず行動があって、その行動することによってそこから楽しさが生まれてくるということが、現実には非常に多いのではないかという気がするんです。

今、御質問が出ましたし、先ほど平野先生からお話があったボランティア活動なんですけれども、一昨年でしたしょうか、労働省の婦人少年局の関係で、ボランティア活動をしている若い人たちが、あるいはしていない人も含めてなんですが、そういう人たちを対象にしてボランティア活動の調査をされました。これは報告書ができておりますが、そのときにボランティア活動をしている人たちにどういうきっかけで始めたのかということを開きましたところ、大変意外な結果が生まれ

た。社会的に奉仕したいとか、貢献したいとか、そういう答えが多いんじゃないかというふうに思いましたところ、全然そうじゃないんです。近所にボランティア活動をしている人がいて、最初なんのこともわからないけれども参加してみた。そうしたら案外楽しいことだということに気がついたと。あるいは友達に強引に誘われて行った、それがきっかけで活動し出したとか、いうような答えが多かったのです。つまりまず頭で考える楽しさが先にあって行動が後から来るのではなくて、まず行動があってそこから楽しさだとか、あるいは意義の自覚とかいうことが生まれてくるのではないかという気がするんです。

そこで、指導者となるような人が育たないという点についてですが、私は、まず行動があって、それから精神的なもの、理念を生み出す過程がある意味では欠けているんじゃないかと思えます。そこで指導者の役割というもののが非常に重要になってくる。つまり、まず行動をしてそこから今度はそのボランティア活動というのは実は大変大事なことになるんだという、いわば精神面の自覚みたいなものを相手に持ってもらうような機会を作り出していくことが必要になってきます。

ちょっと話が横道にそれますが、公害に対する住民の反対運動なんていうのも、煙が困

るからとにかく反対するという行動はするんですけども、そこから先それが具体的に一つの運動としてなかなか固まらないということがございます。これも同じように、まず行動がある。しかし、精神的な背景となる考え方が醸成されていく機会が非常に少ないんじゃないかという気がします。そこがある意味ではリーダーが機能すべき最大のポイントなのではないでしょうか。もちろん行動させることは大事ですけども、そこから先のことも大事なのではないかと、こんな感じを持っております。

加藤 よろしゅうございますか。はい。前の方。

道本（石川県・勤労青少年福祉員）

今、御質問になられた方にちょっとお尋ねいたします。行政組織の人やその他と御相談になったことですが、どういうような形で会をお持ちになったんでしょうか。その会のことについて少しお話しを聞かせていただきたいと思います。

中村 私は福祉事務所に勤める者で、行政の機関の中に青少年問題協議会というのがありまして、会長が市長で、各庁から出ていただいた各組織団体の長が委員に任命されております。そして、年に一回一月二三日の勤労感謝の日、市内の中小企業や中学校、高校、専門学校等から推薦された勤労青少年を

招き表彰し、それから映画を見せて、その後懇談会を持ったりするわけなんですけれども、悲しいかなその場であまり意見が出て来ない。やり方に問題があるのかと思って子供たちに後で聞きましたが、いやこういって行われるのが望ましい、我々はこれで楽しいんだという意見がえってくるわけなんです。だからこれが本当に意義のあるものかどうか、模範中というところで、もうじき二三日を迎えるわけなんですけれども、今年はずっと趣向を変えまして、懇談会をやった後、指導者のディスカッションをやりたいと考えております。

道本 私にもそれに近い経験があります。おせんを並べてさあ食べなさいというやり方よりも、今度はどんなおせんにしようかというおせん作りからいっしょにさせる方が参加する人にとっても、意気込みと言いますか喜びと言いますか、そういうものがあるように思います。ですから、福祉員とか、防犯関係の方、公民館の関係の方など青少年を取り巻くところのたくさんの方たちがおられますが、上のほうから役目として押しつけるのではなく、本当に細かい配慮をしながらかつて生きられるような、伸びられるような計画を進めて行くことが大切なのではないかと思えます。

加藤 今のは御意見でございましたね。質

問ではないわけでございますね。

平野（講師） 今の御意見に関連して、青少年問題協議会は横浜市内にもありまして、例えばホームの運営協議会に青年を呼んでもなかなか出て来ないということで頭を悩ますんです。これは、主体はだれなのかということとをまず考えますと、やはり青年たちじゃないかと思えます。ですから例えば、あげせん、すえせん、そういう会合を催すよりは、たとえばそういう行政機関の広報で青年を募って実行委員会を作らせて、会合の開催方を青年たちに考えさせるのも、一つの手じゃないかなというふうに考えます。

先日、横浜スタジアムという新しくできた球場で国際児童年の記念行事がありました。そのときに私たちはパネル展示と募金活動をやろうじゃないかということになりました。そこで、私たちが全部企画してしまおうのではなくて、青年たちを募って実行委員として、どういふパネルがいいのか考えてくれと、企画を全部任せてやってもらいました。実行委員は横浜市の広報を使って集めたのですが、小中学生も合わせて一五〇人集って来ました。ですから、こちらですべておせん立てするんじゃないくて、青年たち自身にやらせることによって、自分たちのこととして考えてくれるんじゃないかなというふうに私も考えてい

ます。

加藤 倉部さんは船橋での御経験から何か御感想ございますか。

倉部 私が担当している話し方教室には、今二一人の青年が来ております。そのうち、三分の二は大卒です。それだけ高学歴なんですけれども、いざ人の前に立って話しをしようという段になると、みんななんとなくたじろいちゃいますね。自分の本当に思っているものが、胸の中にはうず巻いていゝるんだけれども、それを発言する能力がない。そこに青年たちの悩みがあるのではないだろうか。とするとたゞいまのお話を伺いながら考えたことは、もっと発言できる場をつくってあげることがいいんじゃないか。青年たちが集まった時には六人ぐらいのグループに分けてあげて、そして話し合いをちょっとさせる。そうするとお互いに自分の意見がひと言ぐらいはその場では言えるわけですね。そして、それをまとめていくと、自分の出した意見がほかの意見と混じり合って新しいものが形成されていく。そこに、青年にとって自分の主張したものが浮き立っていくという喜びが見出されるのではないだろうか。そんなことで行政の方でいろいろ考えることは大変結構なんです、その形としてもっと青年の意見がはいれるように配慮してあげる工夫が必

要ではないか、そんなふうに思います。

加藤 残り時間がだんだんなくなつてまいりましたが。どうぞ。

A 西山先生にお伺いしたいと思うんですが、勤労青少年は所得のある若者です。戦前の若者というのは比較的所得が少なかつたと思うんですが、現在の勤労青少年は相当な所得を持つておつて、自分の欲求については相当な満足を得られるような消費ができるというふうに考えております。

その勤労青少年が何を考えているかということが、まだ本論の中で比較的少ないように思うんです。勤労青少年ホームに集まつたり、何かの催物に集つて来る勤労青少年というのは、非常に自覚した昔の模範青年であらうというふうに考えられるわけです。それ以外の、喫茶店で二、三人の友達とだべつたり、ディスコに行つたり、自分たちだけの集りというものに対してはそれほど苦痛を感じていないと思われる青少年が、何を考えているか。その人たちが、行政の側若しくは会社側から福祉としてばらまかれてゐる消費の中で、十分満足できないということは考えられるわけですが、それをどういうふうにしたら有効な投資にできるかと、そんなふうなことを考えておるんですが、そのへんのところをちょっと。

西山（講師）

所得がかなり昔の水準と比

べて高く消費力もあるという御認定でございしますが、昔と比べて高いということが今日の水準で高いと果たして言えるかどうか、これが一つ問題になるんじゃないかと思ひます。所得の高さというのは、やはりその時代の平均的レベルを中心にして評価しなければならぬ。そうすると少し答えが違つてくるわけですね。所得は高い、我々の若い時と比べたらもう想像ができないうようないろいろな物を持つてゐる。しかし欲望というのは経済的に言えば無限です。果たして無限かどうかはちょっと問題がございしますが。そうすると、やはり飢餓感とか欠乏感というのがあるんじゃないか。ただし、今の水準で借家住まいをしてテレビを入れて冷蔵庫を入れて、洗濯機を入れたら家族生活というふうなものではできなくて、昔は三〇歳ぐらいにならないと結婚できなかったのが、所得から見ると若い時に結婚ができるというふうな状況になつてきてゐる。ここなどでございしますが、飢餓感があるという場合には昔の水準と同じです。しかし、昔は団結しなれば生きていけないという整合性のある考え方を容易に生み出すことができたのですが、今はそうじゃないですね。多様化の時代になつて、平和主義であつて、自分で選択できる。これが御指摘の一番重大なポイントになるかと思ひます。その中で仮

に先ほどはちょっと引用しましたが昔は平面的な建物の中にぽかんといれられて、すべてのことが了解できるような状況にあった。今は新宿の高層ビルにぽかんと入れられてどうかしろと言われたら二つの対応のし方がある。じつとしてゐるか、冒險精神を発揮して二階三階、一五階、三〇階と探検してみるか、そのようなことができるところがわれわれと違うわけでございます。その指導原理に昔の考え方をそのまま引用したらちよつと問題が出て来る。また価値観も違つてゐるんじゃないか。そこでもう一つ、ここで何か工夫をしなければならぬ。こういうことがわれわれに課されている問題ではないか、昔の道具ではちよつと具合が悪い。新しい道具を開発しなければならぬ時期に來てゐる。これが指導員の悩みであるし、館長の悩みである。勤労青少年ホームには健全な人たちが集まつてゐるということについては、私議論はないわけですが、ところがこれは全勤労青少年の三・五パーセントの人たちです。これを三・五パーセントから一〇パーセントまで増やすことができるかということになりますと、これはもう皆さんといつしよの悩みで、何も私解決のテクニックを持っていません。お互いに悩んでいきたいと思ひます。答えになつておりませんが、これぐらいで御勘弁いただ

きたいと思っています。

加藤 はい、鈴木さん。

鈴木（講師） 何を考えているかという御質問だったんですが、私もちょっとそれに付きまして述べさせていただきます。最初のレポートの中で仕事と余暇とが分離していることが非常に問題じゃないかというのを申し上げたんですけれども、実はこの仕事と余暇とは別のものだというふうに考える考え方と、それからこれはもともととは確か二年ぐらい前に読売新聞紙上において提示されたのではないかと思えますけれども、仕事と余暇とは混合した状態にあるものであるとする考え方の二つがあると思うんです。

その分離しているという考え方の中に、三つございまして、仕事と余暇とは違ひ、そして仕事のほうが大事なんだという分離論仕事型、と私は呼んでおりますが、このタイプ、これは勤労青少年には非常に少なく、五パーセントぐらいしかありません。それから二番目のタイプは、分離論余暇型というタイプでございまして、仕事じゃなくて余暇のほうが生きがいなんだと、これは勤労青少年には二〇パーセントぐらいございます。

それから仕事と余暇とは違ひというふうに考える第三のタイプは、仕事と余暇の分離論のしかも統合型。分離論統合型と私は呼んで

いますが、これは仕事を一所懸命やれば余暇が楽しくなる、余暇を一所懸命楽しめば仕事に対するやる気が起こる、つまり仕事と余暇とは違ひものだけれども両方が補完し合っているという考え方です。これは大変日本人好みの考え方の一つでございまして、中高年層だと六〇パーセントか七〇パーセント近く出るんですけれども、勤労青少年ではこれが五〇パーセントぐらい出ます。

これらに対して混合論、つまり仕事と余暇というものが同時に、この場合余暇と言っているのかどうか、遊びというふうに表現したほうがいいのかもしいかなと思うんですが、仕事と遊びというのが並行してあるようなタイプです。これを私は混合論とこう呼んでいますが、これには二つの種類がございまして、混合論疎外型というのと混合論統合型というのがございまして。混合論疎外型というのは仕事をしながら遊びのことを考える。それから遊びながら、十分遊べばいいのに、仕事のことが頭から離れないで十分楽しめない。これは、言ってみれば仕事の面でも遊びの面でも片方のものが足をひっぱっちゃってどうも十分楽しめない、こういうタイプですね。これが本当は多いと思います。もっと多いのではないかと思ひますけれども、勤労青少年を調査してみますと一五パーセントぐらい

です。

それから、もう一つの混合論統合型。これも仕事と遊びが混合しているのですが、混合していることが実は大変意味のあることであり、余暇的要素、遊び的要素を持った仕事、それから仕事の要素をもった遊び、こういうものが存在している。

生産方式においてフォードシステムとボルボシステムというのがよく対比されます。フォードシステムの場合には、仕事と遊びを完全に分離致しまして、仕事をしている時は流し作業方式で仕事だけに専念させ、これは苦しい時間だが後には楽しみの遊びの時間が待っているという方式で工場の近代化が行われてきたわけでこれは分離論統合型でございまして。これに対して、ボルボシステムは仕事をしながら、昨日おれはこんな楽しいことをやったんだというように話をして、みんなで和気あいあいと一つのボルボを造る。ボルボという自動車を造る段階において、いわゆる円卓方式でみんないろいろな遊びの話なんかも和気あいあいとしながら仕事をしていくという、この場合は遊びの要因が仕事にはいっているということで混合論統合型であると言えます。そして、このボルボシステムはフォードシステムよりもむしろ効率が高いというところが最近では言われています。こういう

労働の場面においては、遊び的要因をその中に入れるということが非常に大事だということと言われているわけです。このタイプは、青少年には以前は非常に少なかったのですが、最近、調査をやりますと一〇パーセントぐらい出てきているんですね。

更に、これは余暇の場面においてはどのようなことになるのかと言うと、仕事の要素を持った遊びというものが、やっぱりあるのではないかということです。よく言われますとおり、例えばアメリカで週休三日制が普及したら、その三日間の休みにいったい何をするのかというと、十分遊ぶのかと思うと実は大部分の人がセカンドワークをやり出す。つまり、結局余暇の時間に人間が最終的に考えることは、何か仕事の余暇をやりたいという傾向が強くなるのではないのでしょうか。

先ほどの御質問の中にもありました地域活動だとか、あるいは平野先生の学習というところが余暇の中で非常に重要だとかというお話は、全部それに関連しているんじゃないかと思えます。現状において、「何を考えているか」ということについては今お話しした数字のとおりですけれども、これからどうあるべきかということを考えて場合には、さっきのいわゆる混合論統合型において、まあ皆さん方のお立場で言えば仕事の要素を持った遊び

と言いますか、これをどう組み立てるかということがこれから大変重要な一つの問題として我々に要求されているのではないだろうか、こんなふうに考えております。

加藤 ただいま鈴木さんから、読売新聞でうんぬんというお話がございましたけれども、実は確か四、五年前だと思えますが、隣の経団連会館で日独青年会議というのを致しました。ドイツより、二〇代から三〇代の青年の指導者のような人を呼びまして、日本の学者と討論会をやったわけです。その時にこの仕事と余暇の話が出ました。昭和四七年に、第一回の総理府の世界青年意識調査というのがございました。日本の青年の中に仕事の中に生きがいを見出すという青年が確か二〇パーセントか三〇パーセントぐらいあったんです。これは、日本の青年と諸外国の青年と比べた場合に圧倒的に高いわけです。それをドイツの青年が見まして、大変うらやましいと言うわけです。我々は仕事と余暇とを全く切り離して考えている。しかし将来の方向としては仕事と余暇が一体化されるような社会を我々は望んでいるんだというような話が出たわけです。それが今鈴木さんがおっしゃった、難しい言葉ですが、混合論統合型というのにあてはまると思いますが、かのドイツの青年たちは、更に飛躍した考えて、ぼくらはついて

いけなかったんですが、仕事をしたいときに仕事をする、遊びたいときに遊びをする、そういうなんというか、大変哲学的な、昔の禅宗の坊さんのような生活を指向して運動しているというようなことを聞いたわけでございます。

蛇足ですが、ちょっと付け加えました。もう残り時間がございませんが、どうしましょうか。はい、どうぞ。一番前の方

道本 先生方に対する質問ではございませんけれども、この労働省から出していただいております「転職希望率及び転職希望の理由別構成比」の中の「その他一八パーセント」というのがございますが、その一八パーセントの中の主なものを二つか三つ、労働省の方がおられましたらちょっとお教えいただきたいと思うのですけれども。

加藤 よろしくお願いしますか。どなたかおわかりの方がいらっしゃれば御質問にお答えしたいと思えます。お手元にデータがないとちょっとお答えにくいと思えますが。

白浜（労働省・勤労青少年福祉専門官）

その他というのはいろいろなものはいってあります。ここに原表を持ってきておりませんので、後ほど文書でもお答えしたいと思います。

道本 はい、わかりました。ありがとうございます。

加藤 では、後ほど労働省の方からデータ

をお見せするそうでございますから。

それでは何か労働省の方に対する御要望等がございましたら、残る時間わずかでございますが、お一人かお二人お受けいたします。もしなければ終りたいと、あ、どうぞ。

B 勤労青少年ホームの利用者は、法規

により中小企業等に就職している青少年というふうに私どもは理解しております。ところで、私のところは人口四万人ぐらゐの小さな市で、半分は農村地帯でございます。したがって、農業に従事する若い勤労者がかなりあるわけです。農業の担い手センターというふうな施設が私の町にもできることになっておりまして、農業の次代を担う若い青少年のための施設ということになります。農業の者をそこへ行かせて、中小企業の就職者はこちら（ホーム）にとるというふうなことができるかどうか。同じような青少年に対して、二重の施設ができるということはいかがであるのかという疑問を持っているわけでございます。

加藤 今のは要望としてお聞きしておいてよろしくでございますか。どうですか。それでは御要望としてお聞きしておくそうでございます。

はい、どうぞ。

大井（静岡県・島田市勤労青少年

ホーム館長）

本日のテーマとは直接関係ございませんけれども、要望ということで、本日は婦人少年局長さん、それから年少労働課長さんもお見えのことと思っておりますので、ぜひお耳に入れてお願いしたいことがございますので申し上げます。

と申し上げますのは、勤労青少年ホームが定期に継続して発行しております広報紙の郵便物料金扱いについてのことなんですけれども、全国各ホームにおきましては毎月又は隔月と定期に継続してホーム広報紙を発行し、それぞれのホームの活発な活動状況を紹介して、いるわけでございます。この広報紙をお互いに各ホームに郵送し情報の交換をし合って、ホーム活動の充実・向上のための貴重な資料として活用する一方、管内の事業所とか行政関係者等、広い範囲に郵送してホーム活動を周知していただいて、同時に各方面の御理解と御協力を深めていただいております。サービスマーケティング的な性格を持つ勤労青少年ホームにとって、ホームの広報紙というのは、運営上かつ活動の発展を期するためにも欠かすことのできない資料として有効に機能してゐるわけでございます。しかしながら、このホーム広報紙の郵送料につきましては、公共のための特殊なものであるにもかかわらず、残念な

が第一種郵便物として一般料金で取り扱われておりまして、第三種又は第四種の郵便物としての認可は得られないというのが現実でございます。したがって、私のところの例で申し上げますと、人口七万人、登録が一五〇〇人程度ですけれども、広報紙の発行部数が毎月一〇〇〇部、このうち郵送分が八〇〇部で、郵送料が月額四万円です。年額にして四八万円という大きな額になるわけでございます。全国各ホームにおきましても、多少の差こそあれ、このように広報紙を発行の都度多額な郵便料を必要とし、財政面で苦しい圧迫を受けているというのが実情であろうかと存じます。つきましては、勤労青少年ホームが発行する広報紙の郵便料につきましては、ぜひとも労働省から郵政省に折衝されまして、広報紙がホーム活動という公共の事項を報道し、あまねくかつ定期的に継続して発行する刊行物である点を十分認識していただきまして、また一方他の類似的な刊行物の多くがはたまたむしろ公共性がより低いと思われる刊行物でさえも、第三種等の取り扱いを受けている現状とを十分勘案していただきまして、できればホーム広報紙については第三種等の認可が一括取りつけていただけますよう、格別のお取り扱いはからいをお願いたく、切にお願い申し上げます。

なお、御出席の全国の館長さん方には、私のふつつかな発言をお許し願いますとともに、その趣意をおくみ取りくださいましてどうか御賛同を賜りますれば幸いです。よろしく願います。（拍手）

白浜 ただいまの御要望は記録にとつてございますので、労働省の方で検討させていただきます。

加藤 それではシンポジウムをこれで終わらせていただきます。

皆様方、外にお出になると夕刊が売られていると思いますが、今日の閣議で勤労青少年白書というのが総理府から発表されたのが、今日の夕刊に載っていると思います。小中学生の意識と行動を中心にとめたんですが、それを読んでみますと、小中学生の九割は自分たちは中ぐらい、あるいは金持ち、うんと金持ちだと思っているんですね。ところがその小中学生の四割は、一所懸命打ち込む対象がないので生きがいを感じないということを申しております。

つまり、主役と脇役というのがもう小中学生の時からはっきりしておりまして、スポーツでも学力の面でもそうだと思いますが、そのままずっと高等学校に行き、更に勤労青少年になってくるんだと思います。講師の先生からいろいろなお話が出ておりましたけれど

も、脇役について主役についていっぺんもならなかった青年たちを、グループを小さくすることやあるいは役割を与えらるることによって輝かしい主役になることによって、彼らの持っている能力を発揮させてやるということは、皆様方指導者の役割りではないかと思えます。私の感想を簡単に申し上げまして、今日のシンポジウムを終わりにさせていただきます。どうも皆様ありがとうございました。

（拍手）

閉会のことば

労働省婦人少年局年少労働課長

金 平 隆 弘

ひと言簡単にございさつ申し上げます。今朝の小此木先生、それから午後の多数の講師の先生と加藤地三先生の御司会で、勤労青少年は何を考えているかということについての個々具体的な話の例もありましたけれども、大づかみの方向として一応の状況というものがわかったような気がする次第でございます。

しかしながら、むこうの一番端にお座りの津末先生が先ほどおっしゃいましたように、勤労青少年が何を考えているかということもさることながら、勤労青少年に何を考えさせているかということについて考える必要がある、それすなわち我々指導者であり、大人であるということ。その人たちの責任と言いますが、考え方、受

け止め方というようなことがまた大事を面であるとうことを強調されておられたようでございます。こういった観点からも、来年もまたこういう懼しがあるのかとも思いますけれども、ぜひ皆様方のお考えをはっきりさせて、そして日常の行動にうつしていただきたい。その参考になれば非常に幸いであったというふうに思います。

本日はどうも長時間ありがとうございました。これで閉会いたします。

(拍手)

